



RX-78-2 GUNDAM

E.F.S.F. PROTOTYPE CLOSE-COMBAT MOBILE SUIT



1/100 scale MASTER GRADE RX-78-2 GUNDAM

Ver.2.0



地球連邦軍
白兵戦用モビルスーツ
RX-78-2 ガンダム Ver.2.0
1/100スケール マスターグレードモデル

RX-78-2 GUNDAM



地球連邦軍
白兵戦用モビルスーツ
RX-78-2 ガンダム Ver.2.0
1/100スケール マスターグレードモデル



地球連邦軍MS開発経緯

地球連邦軍とジオン公国

人類が宇宙に移民するようになり半世紀あまり。スペースコロニーを母なる大地とするスペースノイド(移民者)達は地球に根を下ろす連邦政府官僚達の管理体制からの脱却を望み独立の道を歩み始める。

旧世紀末葉、地球連邦は、当時ほとんど機能していなかった既存の汎地球的規模の国際機構に代わる全人類を対象とする統治システムとして成立した。これはあくまで緊急避難的なものであった。また、人口増加や地球環境悪化などの諸問題を一挙に解決する手段として選択された「宇宙移民」を、強力に推進する組織としての機能を果たしていた。その目的を果たすために連邦政府には、国家単位を上回る権限が与えられていた。「地球連邦軍」は、その決定案件を執行するために設立されたのである。絶対民主主義によって運営される連邦政府は、各コロニーの集団であるサイドをひとつの行政単位としてその統治下に置いていた。成立した際の事情もあって、連邦政府が掌握する権限は多岐にわたり、コロニーの自治権は無いに等しかった。宇宙移民計画に一定の目処が立ってから後も、連邦政府はそれらの既得権をコロニーに委譲しようとはしなかった。それに反旗を翻したのが、ジオン・ズム・ダイクンである。

U.C.(宇宙世紀)0053年、サイド3の首相に選出されたジオンは、コロニーの自治権の獲得や地球環境の回復などを唱え、0058年にサイド3を「ジオン共和国」として独立を宣言。腹心のデギン・ソド・ザビは、連邦の駐留軍を接収して国防隊を発足させた。ジオン自身は粘り強い交渉を通じてコロニーが一方的に押取られる経済構造の改善などを目指していたが、連邦政府による経済制裁や示威行動がサイド3を疲弊させていった。0065年にはジオン派とデギン派の軋轢が表面化し、0067年に連邦議会で「コロニー自治権整備法案」が棄却されるに及び、両者の対立は決定的なものとなった。その折しも折り、0068年にジオンが病に倒れ、代わってデギンが首相に就任する。翌0069年8月15日、デギンは「ジオン公国宣言」を発して公王となり軍事独裁を施行。連邦政府との対決姿勢を明確にしたのであった。

RX計画とは

連邦政府は公国軍が開発を進めているMSを軽視しながらもその存在を無視はできないと考えようになった。その未知なる脅威に対抗しうるべく「巨大人型兵器」を開発する。

RX計画とは、U.C.0078年3月に連邦軍が実施した「MS(モビルスーツ)を研究・開発」する計画のことである。開戦以前、ジオニック社が開発したMSそのものは、連邦軍の反応を探るために、平和利用の作業機器としてジオン公国が自ら公開していた。デモ用の装甲に非武装で公開されたザクの試験風景を見た連邦軍首脳部は、巨大ではあるが、そのためレーダーなどによって遠距離からでも捕捉されやすく、固定武装も一切持たない欠陥兵器であり、軍事的な脅威とはならないと判断したのである。しかし、一部の軍関係者は、公国軍による教導機動大隊編成の情報や、演習に遭遇した兵士の報告などを勘案し、「巨大人型兵器」の開発と、その対抗措置を含む基礎研究を民間企業も巻き込んで発動させたのである。とはいえ、確たる財源もなかったため、軍需産業に対しては、既に執行されている兵器研究の予算枠の割譲や統廃合などで融通させた。また、民間企業にも広く浅く試案や試料を募った事で、各種のアイデアは兵器産業に特有の閉鎖性に影響されず、膨大な基礎資料が参集することとなったのである。

例えば、ルナ・チタニウム合金を利用した鍛造技術の共有化は、参加企業がそれぞれの得意分野で応用する事で、装甲材や構造材などのバリエーションを生み出すきっかけとなり、メガ粒子を輸送寸前の状態で保持するエネルギーCAP(キャパシター)技術の確立は、重電機メーカー傘下の家電部門が保有するコ・ジェネレーションシステムのノウハウを援用することで可能となったものだ。このふたつの技術は、ザク・マニングをものともしない装甲や、一撃でザクを撃破するビーム・ライフルとして結果している。ほかにも、コア・ブロック・システムの根幹を成す教育型コンピュータの案も、民生用のホビーソフトなどを開発していた中小規模のベンチャー企業が、そのメインフレームのアーキテクチャを提供していた。MS自身が戦闘を経験する事でケーススタディを蓄積する際、ヘッドユニットのサブシステムと常にリンクする事で、メインコンピュータの負担を減らすなどのノウハウは、既存の軍需メーカーでは発想し得ない類のものであったのである。逆に言えば、これらの技術は、連邦軍がMSというものを理解していなかったため、具体的な要求性能や仕様を提示しなかった(できなかった)ことが幸いしていたとも言えるのである。

そしてU.C.0079年、一年戦争が勃発し、MSの驚異的な威力を目の当たりにした連邦軍首脳は、戦術的にもMSに対抗せざるを得なくなった。この時期の放埒な発想がV作戦によって収斂されることで、RXシリーズを成功に導く原動力となったのである。



MS-06F



RX-78-2 GUNDAM



Innerframe & Coreblock



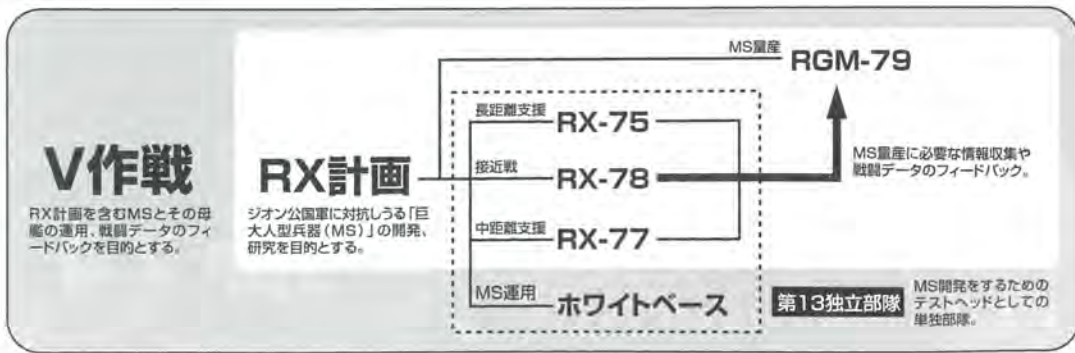
Core Fighter

勝利のV作戦

V作戦とは、一週間戦争の敗退やその他局地での劣性に対して挽回をはかるために発動されたプラン(開発運用計画)である。その内容はRX計画を含む一大プロジェクトであった。

「V作戦」は、U.C.0079年初頭の一週間戦争(同年1月3日~10日)からルウム戦役(同月15日~16日)に至る戦闘などで喪失した宇宙艦隊の再建を企図した「ピンソン計画」と同じ、U.C.0079年4月1日をもって発動した。V作戦は、MSの開発量産と、その運用母艦となる強襲揚陸艦の開発建造を行い、同時にその戦闘システムを含む兵器体系の創出をも視野に入れた空前絶後の大プロジェクトである。前年実施された「RX計画」によって集積された案を取捨選択し、有用なコンセプトを複数並行していったばかりか、試作と量産の行程さえも同時に進行していたのである。また、戦闘の拡大に伴う敵MSの鹵獲なども技術的に大いに寄与している。また、公国軍の地球侵攻は極めて迅速であり、V計画が発動した同年4月の時点で、既に地上のおよそ1/3が制圧されていた。特に重力下におけるMSの優位性は抜き出ており、対抗上MSの早期配備が強く求められていた。そのため、開発途上で先行試作機や互換性の極めて低いバリエーションなどもいくつか生み出され、少量量産されている。とは言っても、V作戦発動の時点で、連邦軍が明確に公国軍に勝っていた技術は装甲用の新素材とビーム兵器の小型化技術の2点のみであり、熱核融合炉や駆動装置の性能などはほぼ同等だったと言われている。その中から、動員可能な企業や技術者を糾合し、RX計画によって導き出された理想値と平均値に基づいて、連邦軍のあるべきMSの姿が模索された。さらにV作戦には、その開発・量産のみならず、運用に伴う検証と進化・改良なども含まれていたのである。

<V作戦及びRX計画概念図>



RX-78-2 ガンダム 開発経緯と運用目的

Development and operation

RX-78-2 ガンダムは各分野の最高の技術を盛り込んだ、コスト度外視の機体である。V作戦の一環である戦闘データのフィードバックなどは、「教育型コンピュータ」や「コア・ブロック・システム」の確立により実現された。ガンダムは驚異的サバイビリティを持ち、無改造であらゆる局面への対応が可能である。

公国軍のザクは、手持ちの兵器などを持ち替える事で機能を分化していたが、後に様々な改造や改装を余儀なくされた。連邦軍は当初より機能を分化した機体開発を想定しており、実現可能性や開発コストなどで検討していたこの時期は、簡易型の戦闘ポッドや巨大な戦闘車両なども検討されていたのである。それら複数の試案を経て、MSの基礎的な戦闘形態は3つに絞り込まれた。これが、V作戦の「理想値」とされた「RXシリーズ」である。すなわち、格闘を含むMS戦闘を主眼とする近接戦闘ユニットとしてRX-78 ガンダム、中距離支援ユニットとしてRX-77 ガンキャノン、砲撃戦ユニットとしてRX-75 ガンタンク、の3タイプである。なかでも「ガンダム」は、RX計画で提案された案のほぼすべてを採用した「万能型」を志向するV作戦の中核を成す機体であった。しかし、MSは連邦軍にとって未知の兵器である。稼働状況や戦闘データ、パイロットのサバイビリティは、いかなる事があっても確保しなければならぬ。RXシリーズが具備する、コア・ブロック・システムをはじめとする過剰な整備性と生存性はそのためであり、その上で、特に「ガンダム」にはあらゆる状況に対応する能力が求められてもいた。水面下での戦闘はともかく、単独での大気圏突入など、MSを開発した公国軍でさえ思いもよらない能力であった。果たして、それを必要とする戦局があるかどうかさえ疑わしいとされていたのである。

U.C.0079年9月18日、サイド7、1パンチにおいて偶発的に戦闘が発生し、WB(ホワイトベース)とRXシリーズMSは、予定外の人員によって運用されることとなった。当事者にとっては災厄のものではあるが、連邦軍のMS開発部にとってみれば願っても無い状況だったと言える。それまでのガンダムの運用データを利用する事により、同年8月には量産型のRGM-79 ジム運用一号機をロールアウトする事ができたのである。あとは、RXシリーズの限界性能を測る実戦投入を残すのみであった。WBがサイド7に寄港したのはまさにそのためでもあったのだ。無論、WBの置かれた状況は理想的なものではなかったが、最低限の運用条件は満たしていた。公国軍は、WBを発見した時点で既に「V作戦」の概要を察知しており、WBとガンダムがその中核である事を確信。これを追撃する。連邦軍首脳部は、その時点でのMSの量産を含む反攻計画の全容を秘匿すべく、敢えてWBを孤立無援の状態に置いていた節がある。WBが寄港したルナツーの反応は、この時期すでにルナツーの工廠においてジムの量産が行われており、公国軍との小競り合い以上の戦闘や機密漏洩を嫌ったためとする説もある。その後、地球に降下したWB部隊は、気がつけば敵勢力の真直中にあり、南米大陸の連邦軍ジャブロー基地に直接向かうことも出来ず、北米大陸から太平洋の横断を余儀なくされる。その途上でザビ家の末子である「地球方面軍」司令ガルマ・ザビ大佐を撃破したため、以後、公国軍の執拗な追撃を受けることとなる。その間、小規模な補給部隊は頻りに派遣されるものの、トリプルAの極秘事項のものであるはずのWBとガンダムは放置され続けた。WB部隊、とりわけガンダムを駆るアムロ・レイは飛び抜けて優秀なパイロットであると評定され、戦闘と整備、補給と修理が繰り返された。そしてこの状況は、オデッサ作戦以降も続くのである。

サイド7を出港して以来、WB部隊の処遇は、偏にレベリ將軍の意向によるものであった。V作戦自体、彼の意向が強く反映されているとされる。直属の配下としてマルダグ補給隊を擁し、WB部隊に対する例外的な支援に関しても、正規軍をテスト台にはできないとして参謀本部の了解も得ていた。参謀本部にとってWB部隊は厄介者であったが、公国軍に於ける評価が高かったため、固として最適であると断じていた。レベリ將軍はそれを逆手に取り、WB部隊のものをMS開発をするためのテストヘッドとしていた。また、新装備や任務の通達に際しても、WB部隊をモルモット扱いしていると言及していた旨が記録されている。実際、WB部隊のRXシリーズMSは、ほぼ過渡期で仕様が変わるほど、細部の形状やスペックに異同があったとされている。中でも大規模な改装を施されたのが、オデッサ戦に前後する時期とジャブローにおけるオーバーホール。さらに、ソロモン海戦に続くMC(マグネット・コーティング)処理を経たものが最終的な仕様だとされている。

RX-78-2 ガンダム スペックと武装

Spec and armaments

サイド7でトライアルを行っていたRX-78タイプの3機の間に、生産工程や視認性などの差別化に伴う塗装パターン以外にスペックの差はほとんど無かったと言われている。RX計画に於いて提出された案のうち、V作戦発動の時点で実現可能なほぼすべての要素をひとつに盛り込んだ機体がRX-78タイプであり、コストを度外視したハイスペックマシンであった。そもそもMSは、ミノフスキー物理学無くしては成立しない兵器であった。動力源となる熱核融合炉こそ、数十年の技術的蓄積があったものの、アクチュエーターへの転用やメガ粒子生成機構の小型化などは、実用化が始まったばかりの未成熟なテクノロジーだったのである。公国軍も、ミノフスキー物理学の応用を進めていたが、連邦軍が動員した工業力は過かに広大な視野を有していた。軍車転用というパラダイムシフトによって、それらの技術が一斉にブレイクスルーを達成したのである。ガンダムは、まさにその粋を凝らした兵器だったのである。実戦投入が始まってからも、RX計画に匹敵する規模で試案の収集は続けられており、本来MSを「機動歩兵」とする連邦軍の枠組みそのものを逸脱するような機動性強化装備なども試験的に供されると言う状況だったのである。



武装に関しては、ガンダムはテストヘッドであった。固定武装は頭部60mmバルカンが2門とビーム・サーベルが2本で、近接格闘戦闘に対応する。ビーム・ライフルは中、長距離において威力を発揮し、実体弾を射出するハイパー・バズーカも用意されていた。また、ガンダム・ハンマー、ハイパー・ハンマーといった投擲質量弾など、人体の延長としての「格闘」を意識した武器も見受けられ、ビーム・サーベルにも、投擲やナギナタのように伸縮可能なユニットも用意されていた。後の量産型にはほとんど採用されていないものも多いが、そのすべてをガンダムは縦横に使いこなしていた。

ちなみに、サイド7に於けるトライアル時に評価試験されていた武装のうち、「スーパー・ナバーム」と呼ばれる装備は、WBへの搬入が不可能な装備やパーツの焼却に使われた以後、実戦での使用記録がほとんど存在しない。この装備は、広域を焼却するためのものと考えられるが、名称が弾種を指すのか射出装置込みの全体を指すのかは不明である。

注意

必ずお読みください

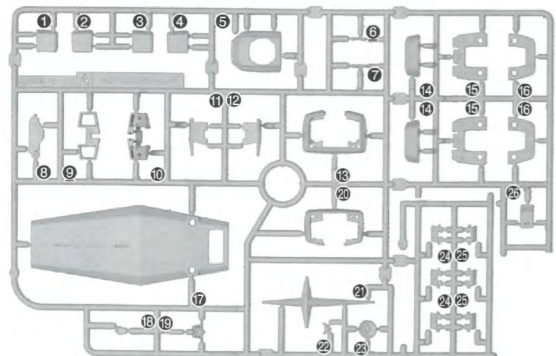
- この商品の対象年齢は15才以上です。〈鋭い部品がありますので、安全上15才未満には適しません。〉
- 小さな部品があります。口の中には絶対に入れないでください。窒息などの危険があります。
- 誤飲の危険がありますので、3才未満のお子様には絶対に与えないでください。
- ビニール袋を頭から被ったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
- 小さなお子様のいるご家庭では、お子様の手の届かないところへ保管し、お子様には絶対に与えないでください。

組立てる時の注意

- 組立てる前に説明書をよく読みましょう。
 - 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
 - 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
 - 部品の中には、やむをえず、とがった所があるものもありますが、気をつけて組み立ててください。
 - 塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
- ※ABS部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はおすすめできません。

パーツリスト

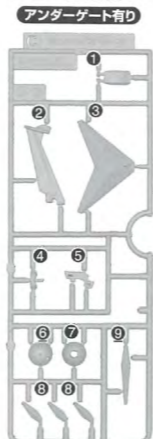
Aパーツ (スチロール樹脂: PS)



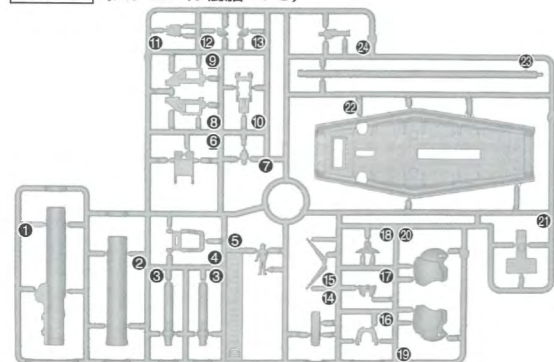
Bパーツ (スチロール樹脂: PS)



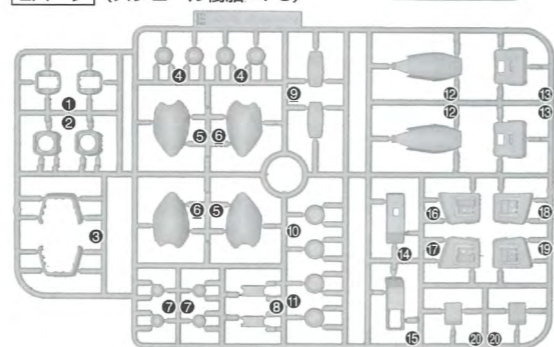
Cパーツ (スチロール樹脂: PS)
アンダーゲート有り



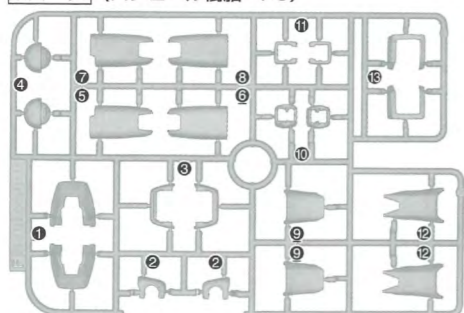
Dパーツ (スチロール樹脂: PS)



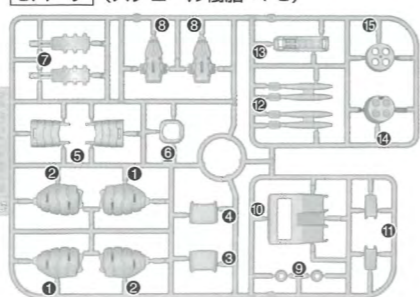
Eパーツ (スチロール樹脂: PS)



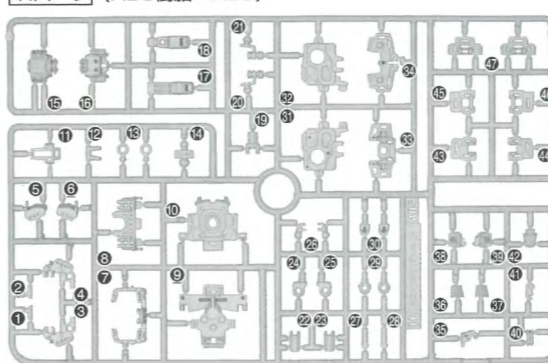
Fパーツ (スチロール樹脂: PS)



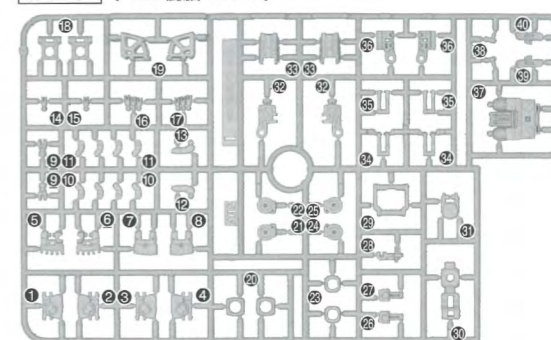
Gパーツ (スチロール樹脂: PS)



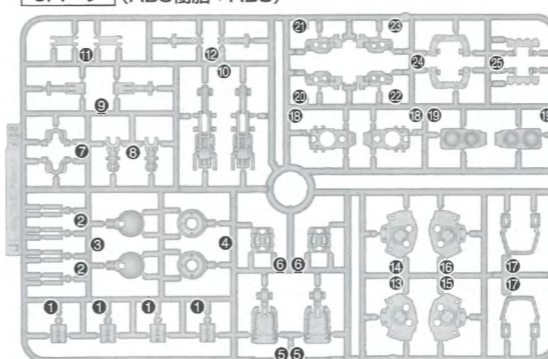
Hパーツ (ABS樹脂: ABS)



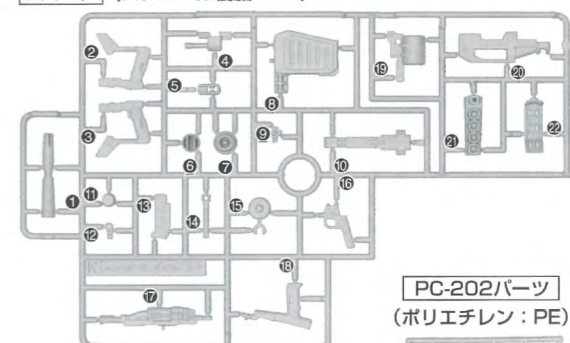
Iパーツ (ABS樹脂: ABS)



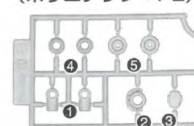
Jパーツ (ABS樹脂: ABS)



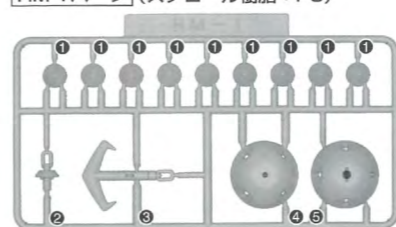
Kパーツ (スチロール樹脂: PS)



PC-202パーツ (ポリエチレン: PE)



HM-1パーツ (スチロール樹脂: PS)



SB1パーツ (スチロール樹脂: PS)

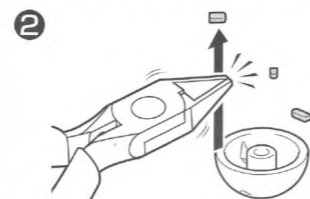
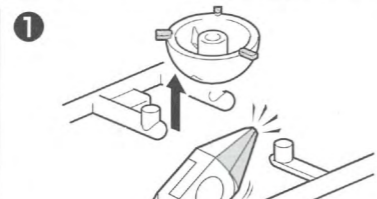
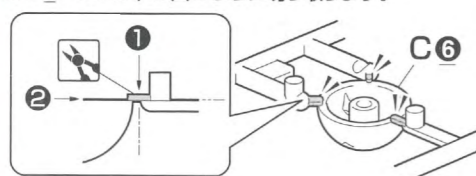


- カラーシール.....1枚
- マーキングシール.....1枚
- ガンダムデカール.....1枚
- ブラチェーン1セット
- ブラチェーン.....1本 (ポリアセタール: POM)
- チェーンつなぎ.....2個 (ポリアセタール: POM)

アンダーゲートの切り方

▶アンダーゲートマークの付いた部品は、下の図のようにキレイに切り取ります。

※C6・C7は下の図のように切り取ります。



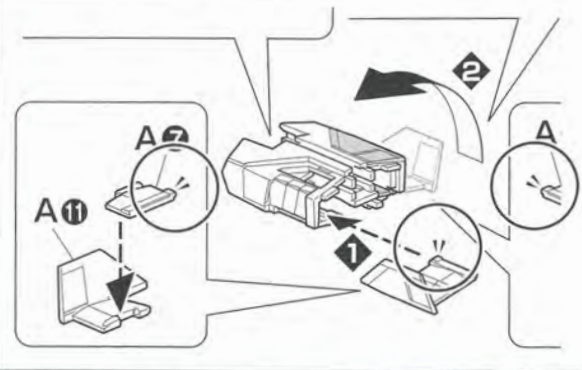
※組立図中の記号説明



組み立て前の基本説明

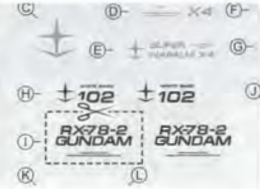
部品の向きに注意してください

※組み立て図中にVのついている部品は、形状や向きに注意して組み立ててください。

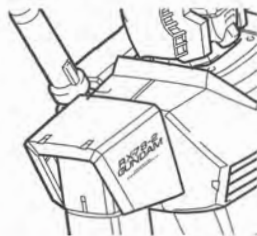


ガンダムデカールの貼りかた

①ガンダムデカールは、転写するマークを保護シートと一緒にマークより大きめに切り出してください。

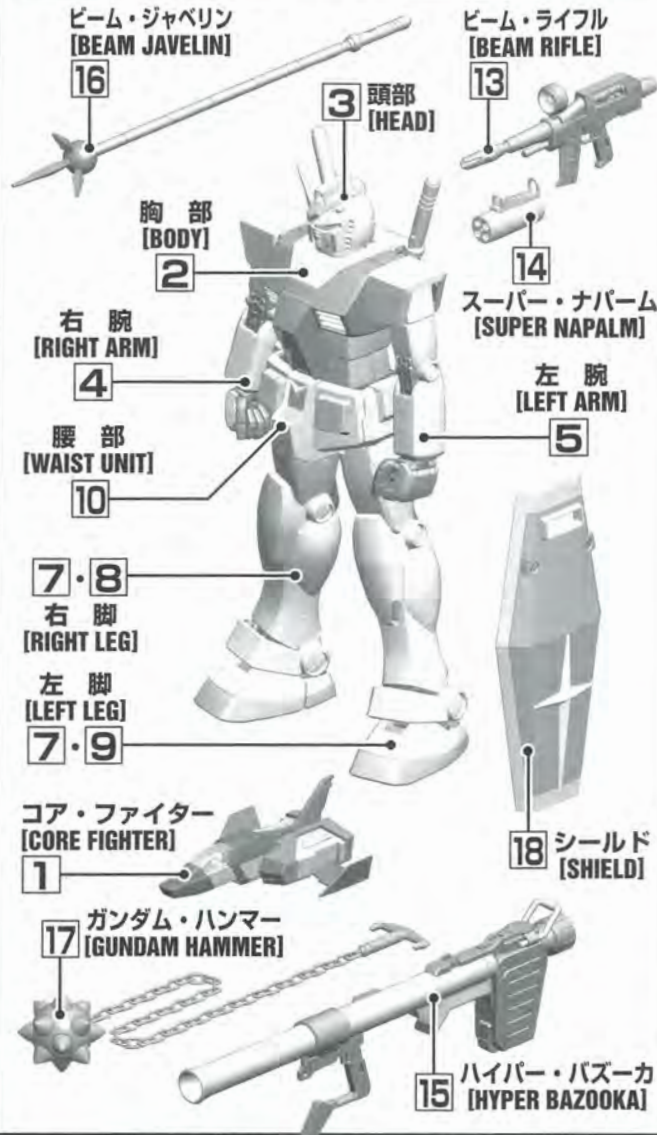


②保護シートをはがし、貼る位置を決めてから、すれないようにセロハンテープ等で固定し、マークの上からボールペン等の先端の丸い物でこすりつけて定着させます。



③シートを静かにはがし、デカールが定着していない部分が残った場合はシートを元に戻し、その部分を再度こすりつけます。

説明書をよく読んで完成させましょう

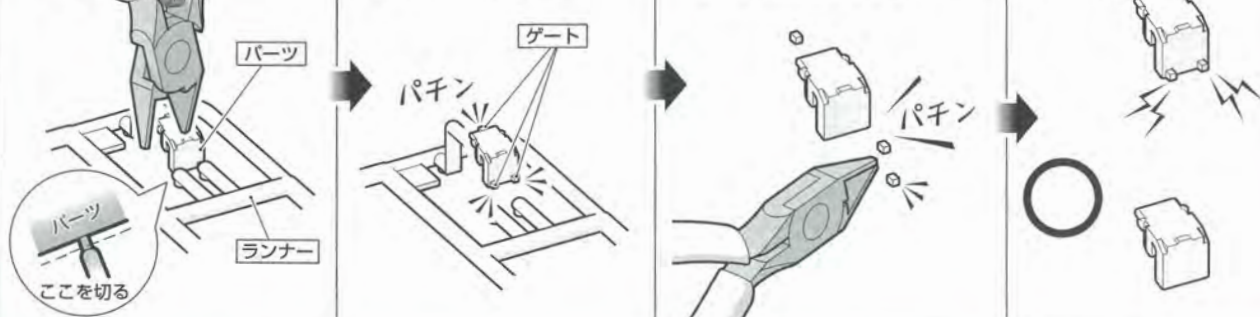


パーツの切り取りかた

①まず、パーツから少し離れた位置にニッパーの刃を入れて切り取ります。

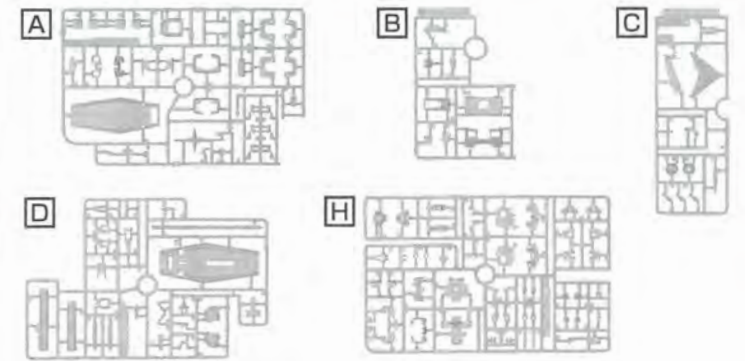
②パーツを切り離して持ちやすくしたところでゲートの処理に入ります。

③ニッパーの刃をパーツに密着させてゲートを切り取れば、きれいに仕上がります。



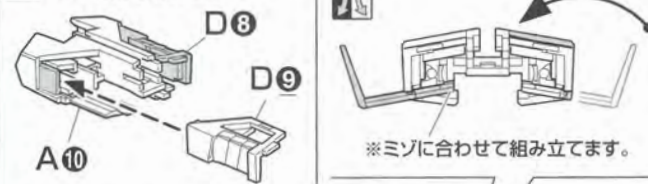
1 CORE FIGHTER

・組立①で使用するパーツ

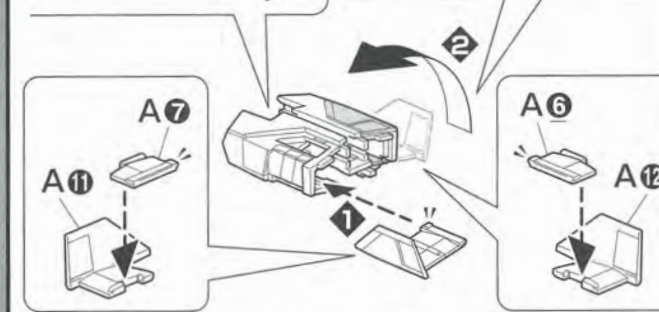


1 (コア・ファイターの組立)

① CORE FIGHTER

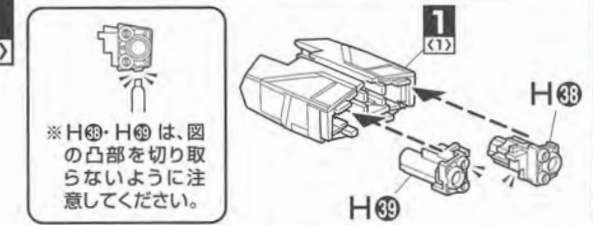


※ミゾに合わせて組み立てます。

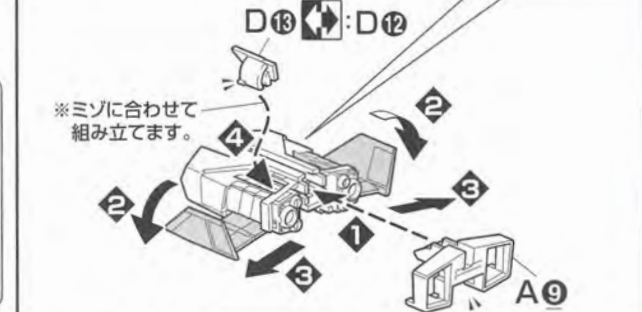


①

②



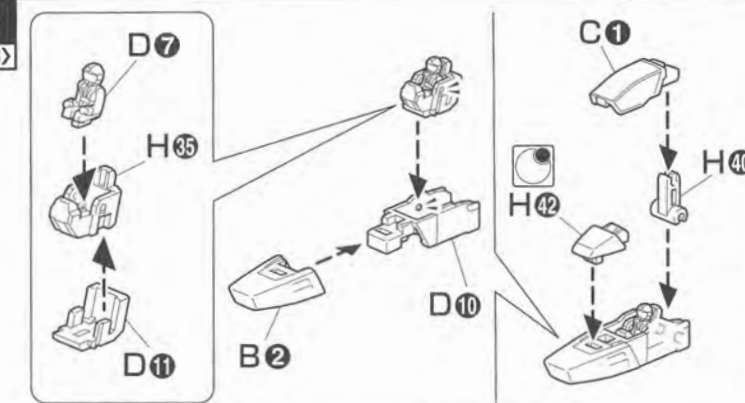
※H38・H39は、図の凸部を切り取らないように注意してください。



※ミゾに合わせて組み立てます。

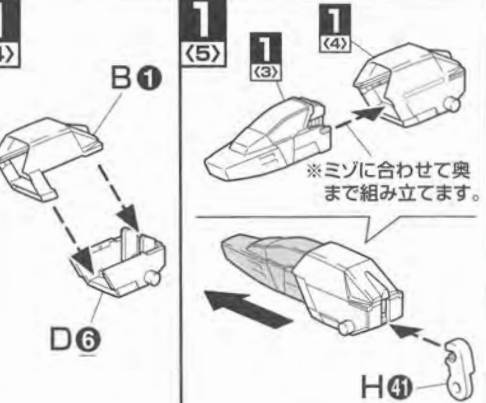
①

③



①

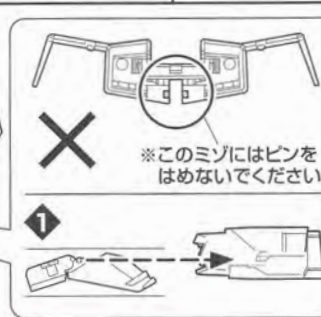
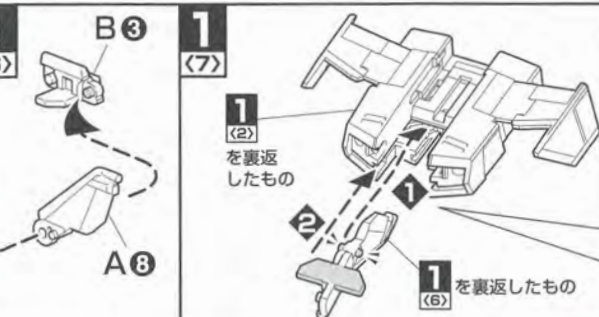
④



※ミゾに合わせて奥まで組み立てます。

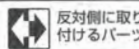
①

⑥



※このミゾにはピンをはめないでください。

※部分の位置に注意して組み立ててください。



1 (8) ※指で押さえながら取り付けます。

1 (7) を裏返したものを

※奥までしっかりと、はめ込みます。

! H37

H36

〈裏から見た図〉

※コクピットは、写真の位置まで回転させてください。

1 (9)

C2

1 (8)

C3

2 BODY UNIT



・組立2で使用するパーツ

A

B

G

H

I

PC

2 (胸部の組立) (1) BODY UNIT

2 (2)

H18

H28

! H22

H29

H25

! H29

H24

H23

! H23

! H29

前

前

前

〈横から見た図〉

〈横から見た図〉

〈横から見た図〉

2 (3)

〈横から見た図〉

〈上から見た図〉

H2

! A25

! H4

H6

! H6

H7

前

2

2

2

〈横から見た図〉

〈上から見た図〉

! H1

A24

! H3

! H6

! H6

! H3

〈横から見た図〉

〈上から見た図〉

〈横から見た図〉

〈横から見た図〉

※きれいに切り取る。

※きれいに切り取る。

2 (4)

H10

前

PC3

2 (3)

A18

2 (5)

A20

H8

! H8

※奥までしっかりと、はめ込みます。

※ミゾに合わせて組み立てます。

B7

B8

2 (4)

※フィン上げた状態で組みます。

2 (6)

H11

B6

2

B4

4

3

※指で軽く押さえながら B6 (ハッチ部分) を下へスライドさせてください。

2 (7)

※きれいに切り取る。

A5

2 (6)

2 (6)

2 (6)

2 (8)

I40

G11

I38

I38

G11

I37

G9

2 (7)

※きれいに切り取る。

G10

2 (7)

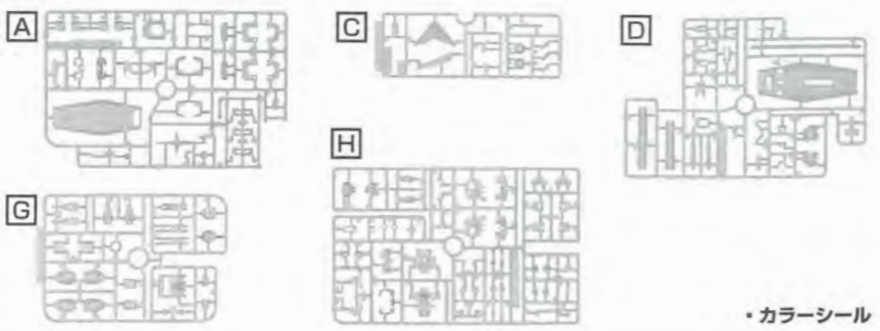
2 (7)

2 (7)

3 HEAD UNIT

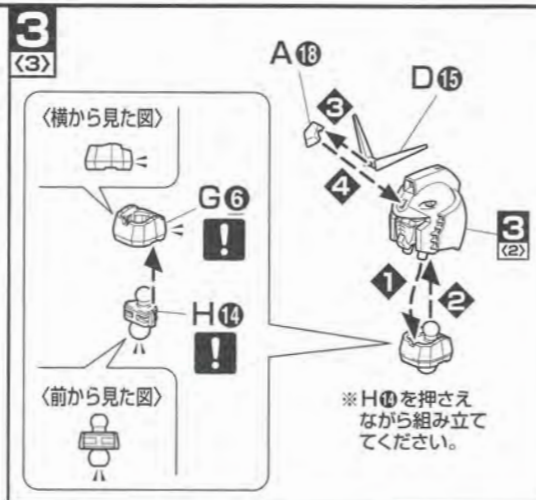
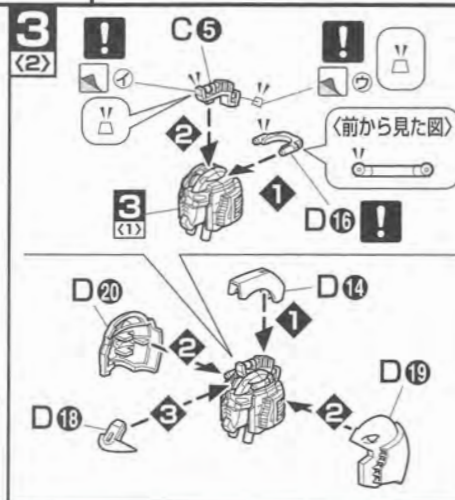
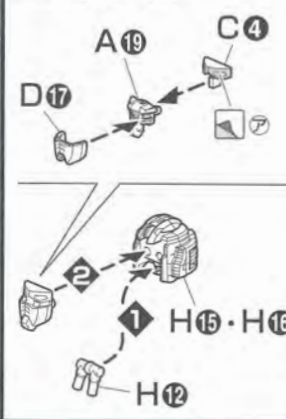


・組立3で使用するパーツ



・カラーシール

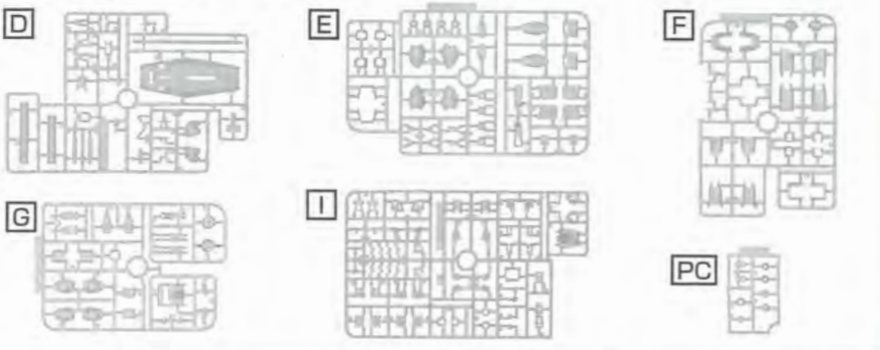
3 (頭部の組立) HEAD UNIT



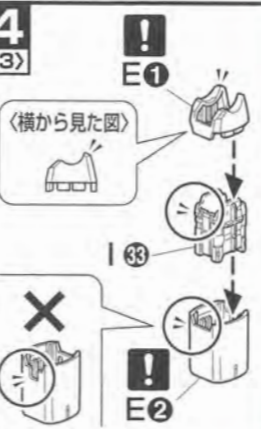
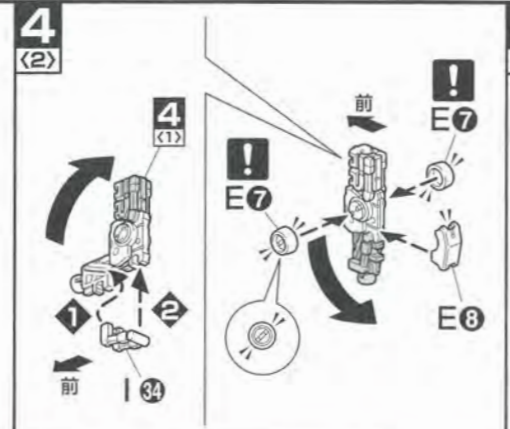
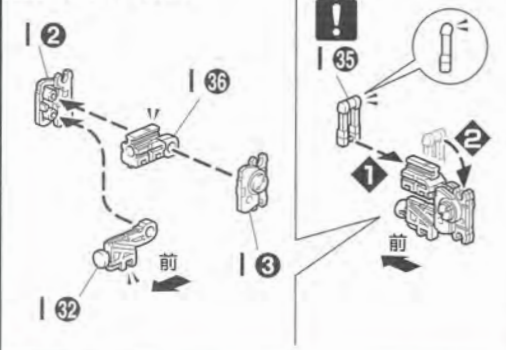
4 5 6 ARM UNIT



・組立4・5・6で使用するパーツ



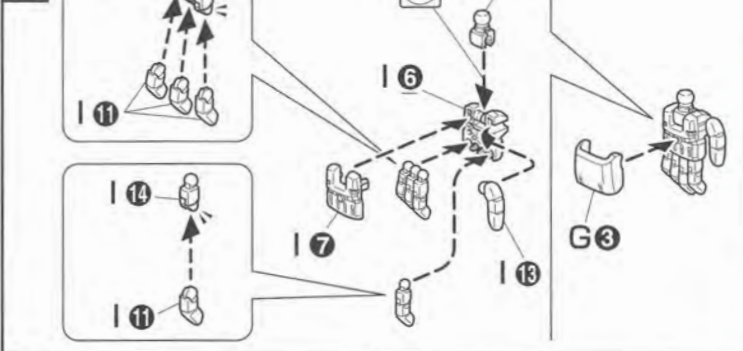
4 (右腕の組立) RIGHT ARM



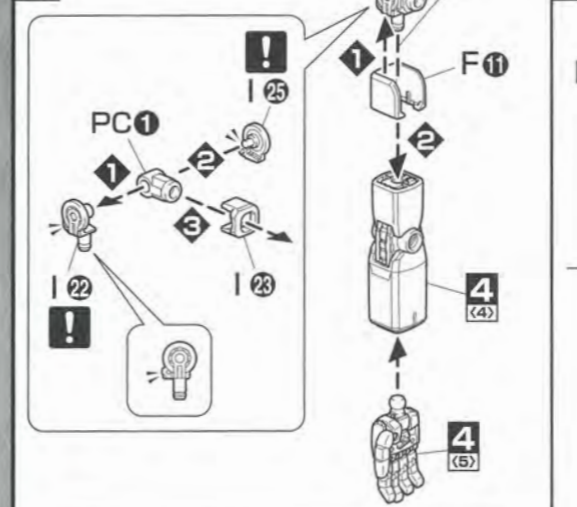
4 (4)



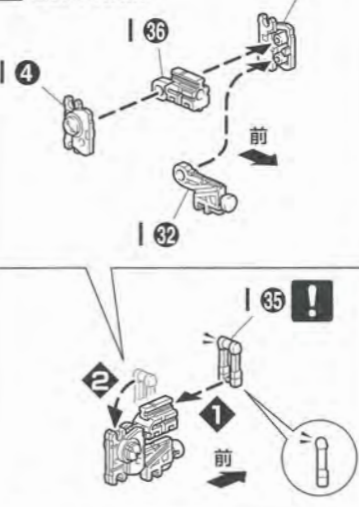
4 (5)



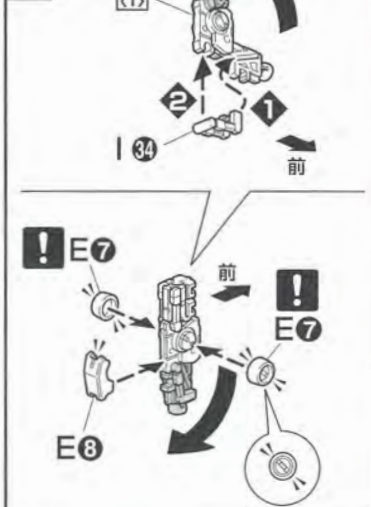
4 (6)



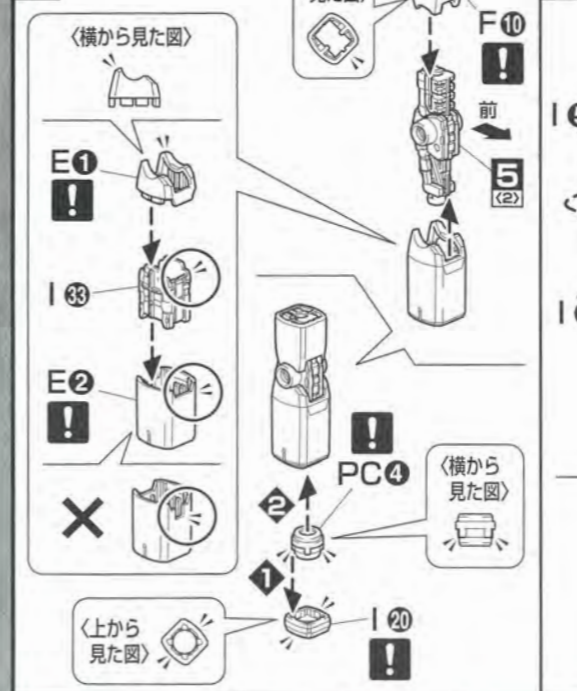
5 (左腕の組立) LEFT ARM



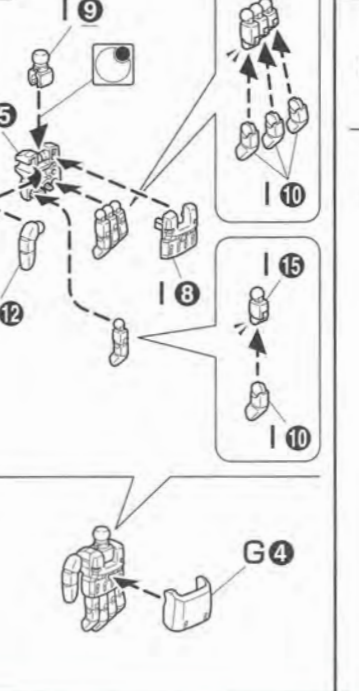
5 (2)



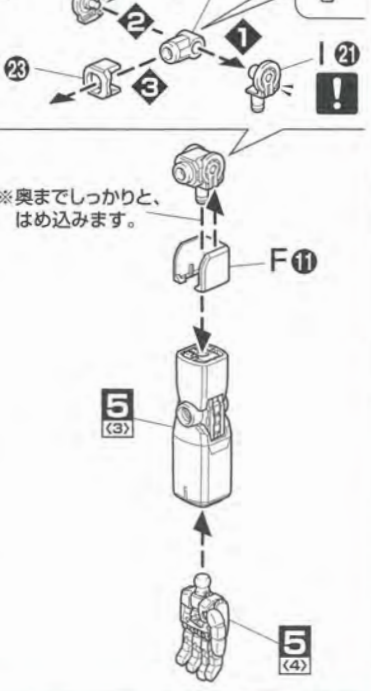
5 (3)



5 (4)



5 (5)



MS Tracks in U.C.0079 (一年戦争の軌跡)



ホワイトベース入港

U.C.0079年1月31日。ルウム戦役での捕縛から逃れたレビル将軍が奇跡の生還を果たし、「ジオンに兵なし」と徹底抗戦を訴え、地球連邦政府は戦争継続を決定した。ジオン公国の内情はもとより、エースパイロットが駆るMS(モビルスーツ)の実力とポテンシャルを目の当たりにしたレビル将軍は、MSこそが次世代の主力兵器であると確信していた。ジオン公国は疲弊している、連邦軍がMSを量産できれば、ザビ家の野望を挫くことができるはずであると。その後、数次にわたる地球降下作戦を展開した公国軍は、瞬間に地上の1/3を制圧したものの、戦況は膠着状態に陥っていた。レビル将軍は、対MS戦を見据えたV作戦を実質的に主導することとなる。連邦軍は、MSを「機動歩兵」と位置づけ、その輸送と展開に加え、後方支援を可能とする「強襲揚陸艦」の建造を決定。MSと連携させることにより、より広汎な領域での運用が可能となる。その活動領域は「万能型」のガンダム能力を基準とし、大気圏の突入・脱出と大気圏内外での巡航能力、更に、強力な火力と対空防御能力、MSの整備能力などが盛り込まれ、「ホワイトベース級強襲揚陸艦」が建造されることとなったのである。サイト7のベイエリアに着いた上級士官が驚嘆の声を上げる。「ほほう、これが?」「はっ!!」下士官が応える。「さすが我が連邦軍の新鋭戦艦だ。この艦とガンダムが完成すれば、ジオン公国を打ち砕くぞ造作もない」だがしかし、このWB(ホワイトベース)を「赤い彗星」が追撃している事を知る者はいなかった。

メディアを連れて

U.C.0079年9月23日。敵部隊を追撃しようとするアムロの眼前に、連邦軍のメディア輸送機が現れた。「そのMS、聞こえるか?山を越えたらゴウの餌食になる。WBに戻れ」凛として澄んだ声の主はマチルダ・アジャン。補給部隊の隊長を務める女性士官(ウェーブ)であった。彼女は自分が派遣されたのは、レビル将軍直々の命令である事を告げる。「ともかく、連邦軍にもあなた方を見捨ててはいない人がいることを忘れないでください」そして、マチルダは言い添えた。「あなたの戦いなければ私たちもやられていたわ、ありがとう」「そ、そんな」まだ幼さの残るくせ毛の少年がはにかむ様子にマチルダは微笑む。その後、WB部隊は公国軍ガルマ・ザビ大佐を部隊ごと殲滅してしまう快挙を果たす。それを受けレビル将軍は、WB部隊を明確に実験部隊として運用する事を決め、表面は戦意高揚のためとして、WBこそNT(ニュータイプ)部隊であると喧伝。内心は確信に基づいて強化パーツの提供などを行っていた。そんな中、WB部隊はランバル隊の襲撃を受ける。一騎打ちでガンダムは最新鋭機グフの懐に潜り込み、その切っ先をかくくってヒート・サーベルごと両腕を一閃。

マチルダの手に届く戦闘データが語りかける。いつしかマチルダは、ジオンが理想としていた人類の革新は、こんな風に始まるのかも知れないと考えていた。オデッサ作戦を間近に控えた状況で、明日はWBに新しい装備を届けなければならない。もしまたアムロと会えたなら、この事を話してみたいと思った……。



PAINTING (塗装)

※よりリアルに仕上げたい方は、下の基本色をご覧ください。※塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

RX-78-2 ガンダム Ver.2.0 指定色

腕、脚などの塗装色 ホワイト(100%) + イエロー(少量) + ライトブラウン(少量)	胸部インテークなどの塗装色 イエロー(45%) + ホワイト(35%) + オレンジ(20%)	目の塗装色 クリアイエロー(100%)
胸部などの塗装色 インディブルー(45%) + ホワイト(35%) + コバルトブルー(20%)	腹部、つま先などの塗装色 モンザレッド(80%) + ホワイト(10%) + イエロー(5%) + ニュートラルグレー(5%)	額センサーなどの塗装色 クリアレッド(100%)
●ABS部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はお勧めできません。※カラー配合は参考値であり、写真とカラーガイドの色は異なる場合があります。	ランドセル、武器などの塗装色 ニュートラルグレー(90%) + ブラック(10%)	ビーム・ジャベリン発光部 蛍光ピンク(100%)

アムロ・レイ

ノーマル・スーツ	私服
ノーマル・スーツの塗装色 ホワイト(100%)	肌色の塗装色 はた色(100%)
ノーマル・スーツ ラインの塗装色 レッド(100%)	頭、靴の塗装色 ウッドブラウン(100%)
ノーマル・スーツ 襟などの塗装色 ミッドナイトブルー(100%)	ジーンズなどの塗装色 ミディアムブルー(70%) + ホワイト(30%)
ブーツなどの塗装色 ミディアムブルー(50%) + ホワイト(50%)	シャツの塗装色 オレンジイエロー(60%) + ホワイト(40%)
パイザー部の塗装色 スカイブルー(100%)	

ワンポイントステップ ~One point step~

スミ入れてみよう!
ガンダムマーカースミ入れ用(別売り)などを使用して、キットのスジ彫りを塗装することで、立体感、リアル感が増します。スミ入れするだけで見違えるような仕上がりになります。



MASTER GRADE GUNDAM HISTORY (1995~2005)

MGシリーズにおいてRX-78-2ガンダムというプロダクトは様々なトライアルを繰り返して来た。ここでは1995年以来リリースされてきたMGガンダムの進化の歴史を検証する。

MASTER GRADE GUNDAM LINEUP



<p>1995年当時「その時点で実現可能な最高のプラモデルをつくる」をコンセプトに完成した記念すべきMG第1号。同スケールも搭載可能。各部ハッチのオープンアップなど初の試みも多く含まれているモデル。</p>	<p>PG(パーフェクトグレード)で得たノウハウをMGで再現することをコンセプトに開発。脚部にシステムインジェクションによる機能性骨格(フレーム)を再現。MGにバージョンアップという概念を取り込んだモデル。</p>	<p>メカデザイナー・カキハジメ氏のデザインコンセプトをもとに、1/100スケールにこだわった機体。スケールを完全統一したコア・ファイターやブレイクなど、意匠を統一したデザイナーズモデル。</p>	<p>ガンブラを題材にした人気コミックからの立体化。追加装甲、追加装備の装着時と、装甲を外したガンダムの2つのバージョンを両立させたモデル。</p>	<p>テレビゲームとのコラボレーションから生まれた機体。あえてコア・ファイターを胴体に収納しないことで、可動性能、アクションを最大限に追求した。成形色の選択なども新鮮なモデル。</p>
---	---	--	--	--

MGガンダムで培われた技術とノウハウの集約

MG RX-78-2 GUNDAM Ver.2.0

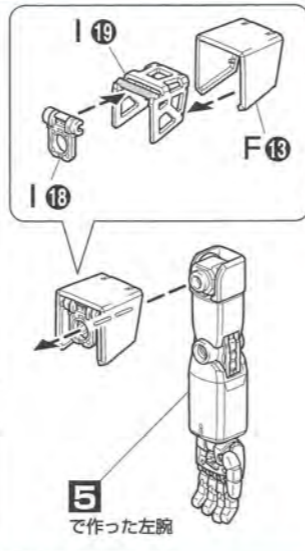
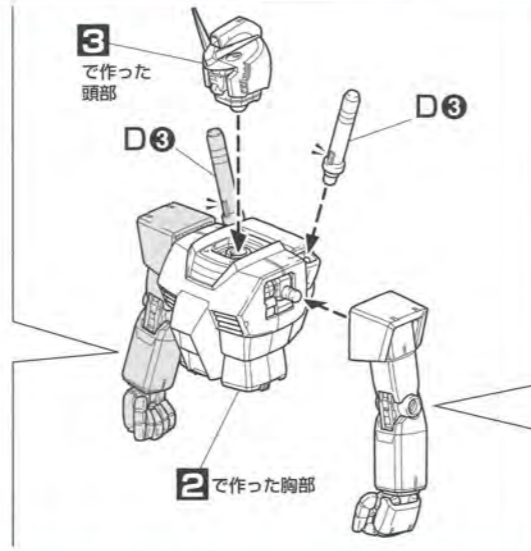
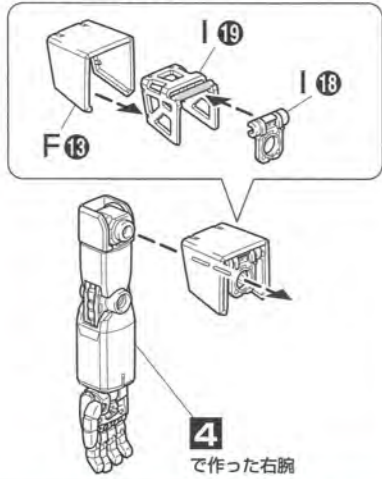
<p>Shield</p> <p>シールドは追加装甲。追加装備を再現するため、2枚を重ねることができる構造となっている。 ※本機にシールドが1枚入っています。</p>	<p>Leg Frame</p> <p>内部フレームは、人体の様な機能性骨格を再現している。</p>	<p>Innerframe & Coreblock</p> <p>セミ・モノコックで構成されたボディはガンダムの可動を最大限引き出す構造になっている。またインナーフレームは1/100コア・ブロックを搭載しながらも最大限の可動表現を可能にした。</p>
<p>Heatproof Field</p> <p>耐熱フィールドのハッチ開閉ギミックを再現。</p>	<p>Super Napalm</p> <p>スーパー・ナパームはMGで初の立体化。ビーム・ライフルに取付が可能。弾倉にはナパーム弾が装填されている。</p>	<p>Semi Monocoque Construction</p> <p>四肢のフレームにもあらゆる可動に対応できる機構が与えられ可動性能を追求した自然な動きが表現できる。</p>



今までに発売されたMG RX-78シリーズのガンダム全てのミッションを内包し、さらにその特徴を集約したモデル。コア・ファイターの変形合体はもちろん、搭載時の可動を妨げない新規フレーム機構や脚部の関節の再構築、それらの要素を新しい解釈のプロポーショナルデザインで再現したガンダムに集約。劇中のアクションをトレースするようなポージングにも対応可能であり表情豊かなモデルとなっている。

MASTER GRADE RX-78-2 GUNDAM Ver.2.0
2008.7

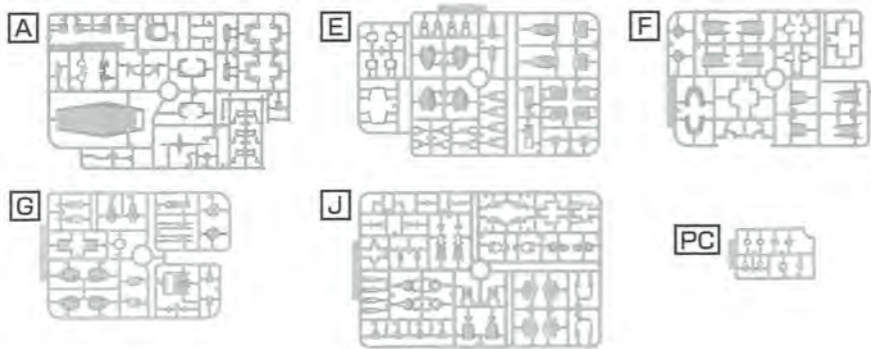
6 [上半身の完成]
UPPER BODY



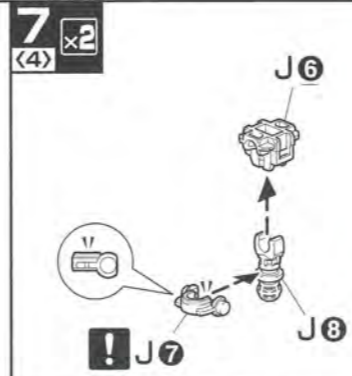
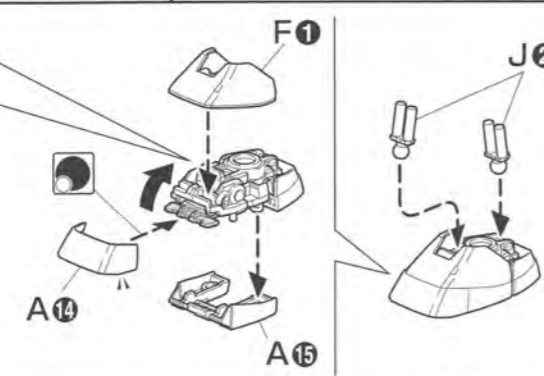
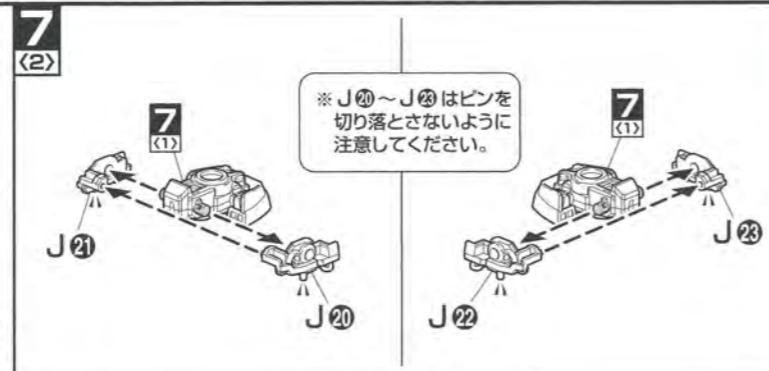
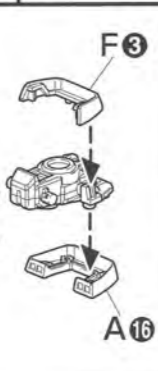
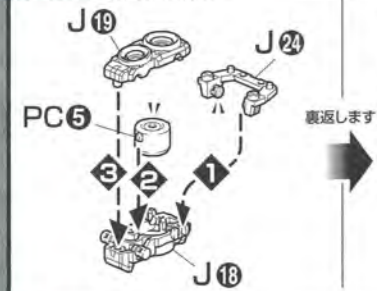
789 LEG UNIT



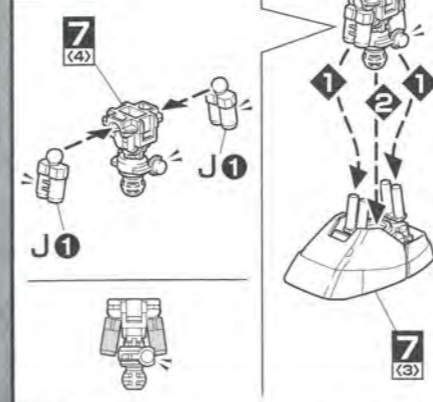
・組立 **7**・**8**・**9** で使用するパーツ



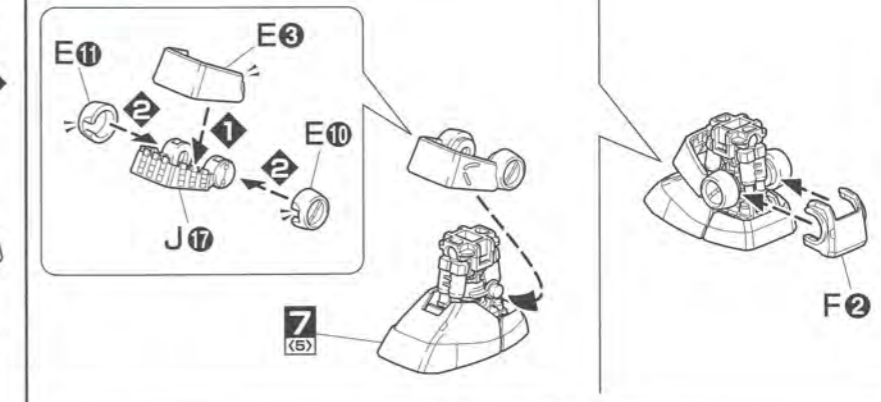
7 (1) **x2** [脚部の組立]
LEG UNIT



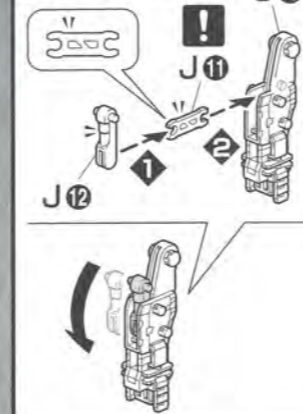
7 (5) **x2**



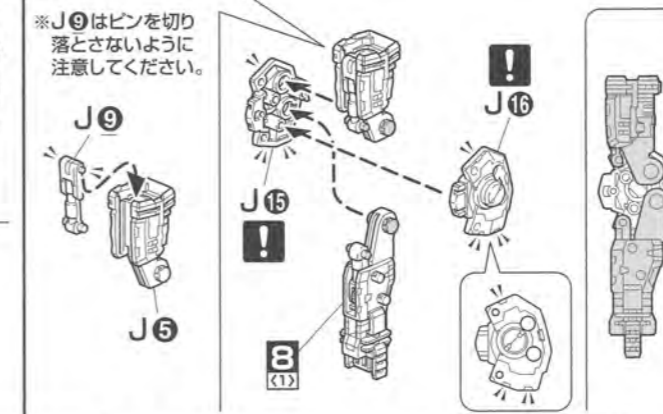
7 (6) **x2**



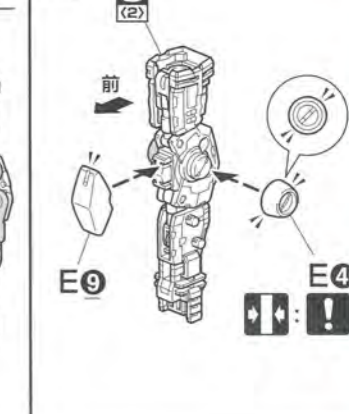
8 (1) [右脚の組立]
RIGHT LEG



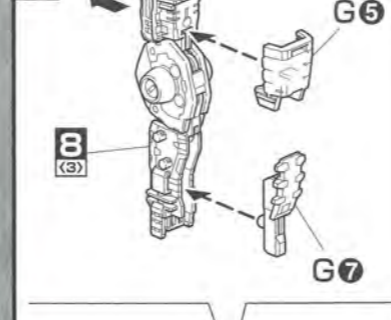
8 (2)



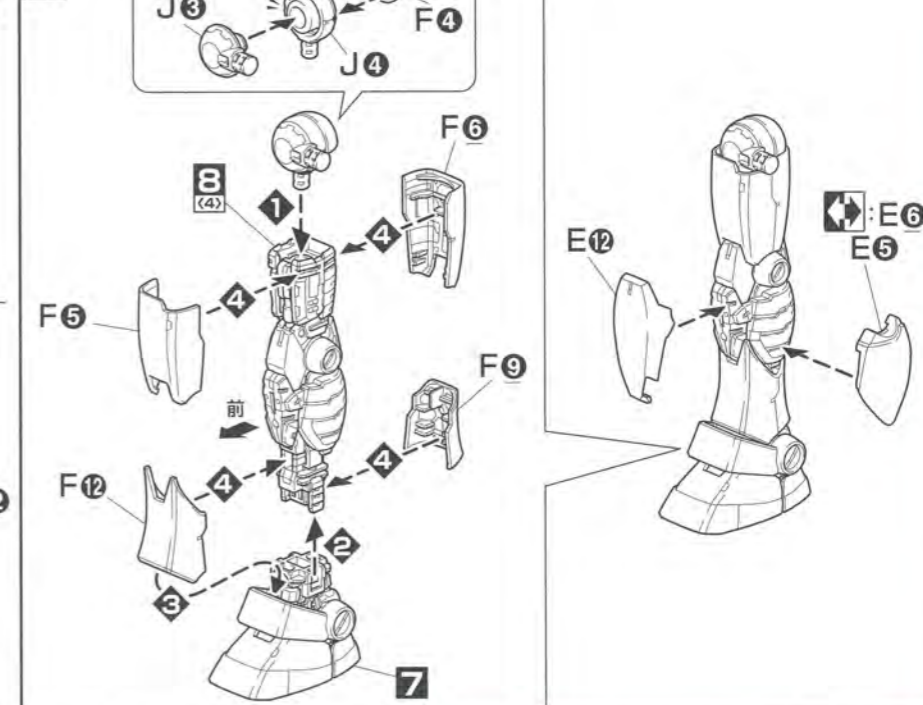
8 (3)



8 (4)

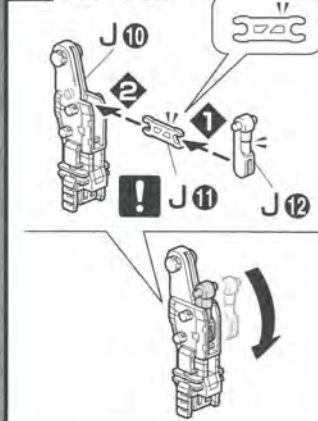


8 (5)



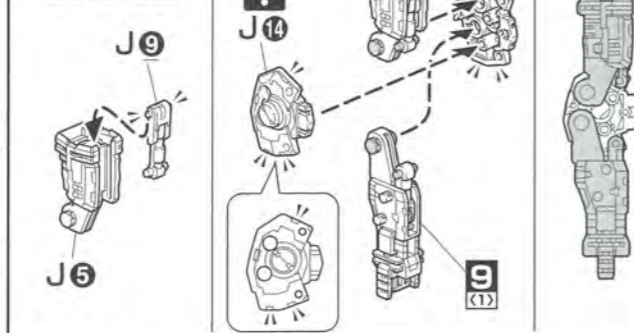
9 [左脚の組立]

(1) LEFT LEG

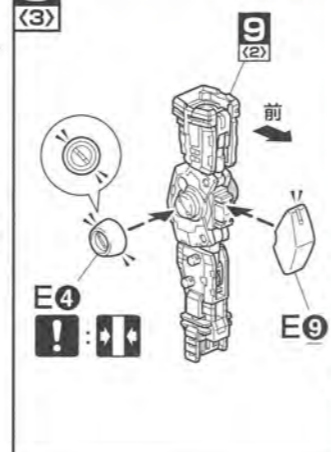


9 (2)

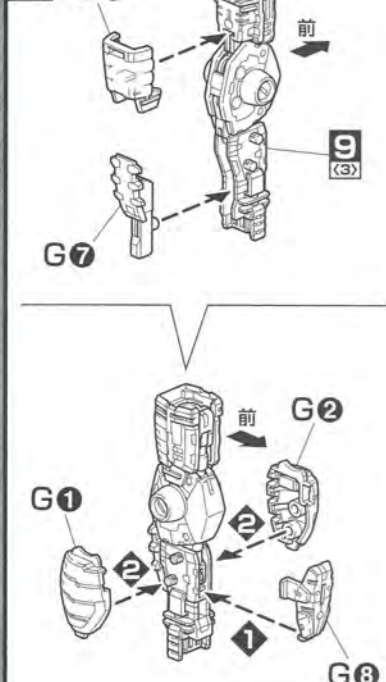
※J9はピンを切り落とさないように注意してください。



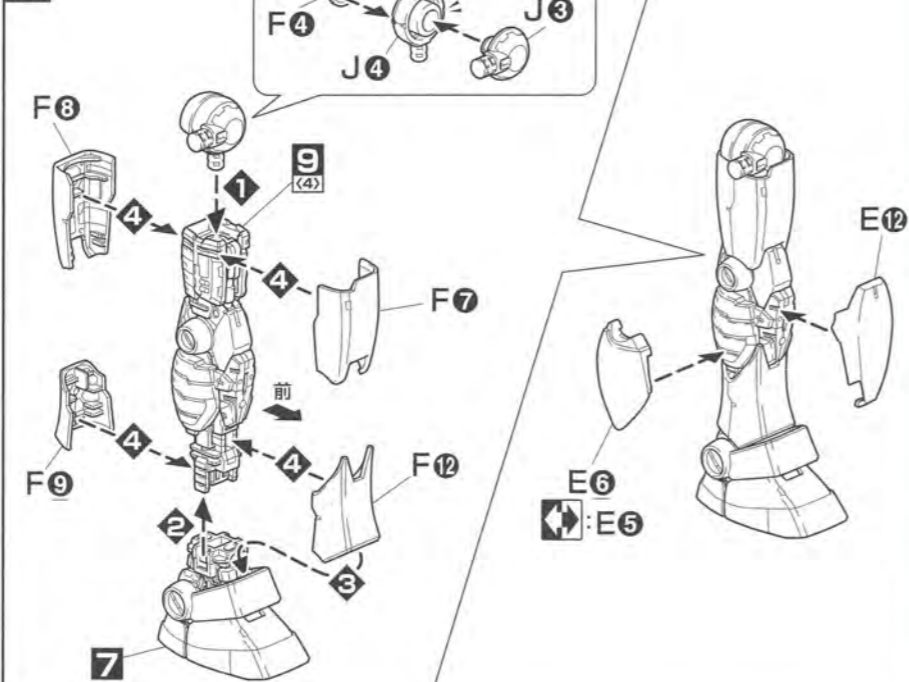
9 (3)



9 (4)

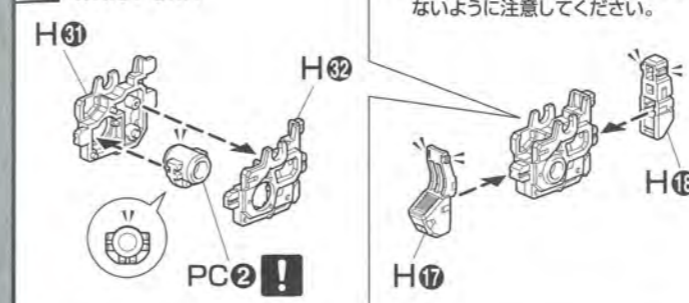


9 (5)

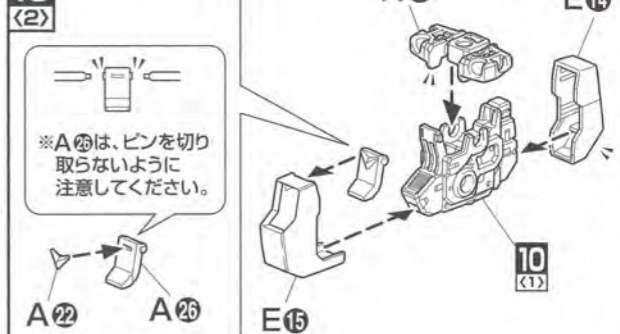


10 [腰部の組立]

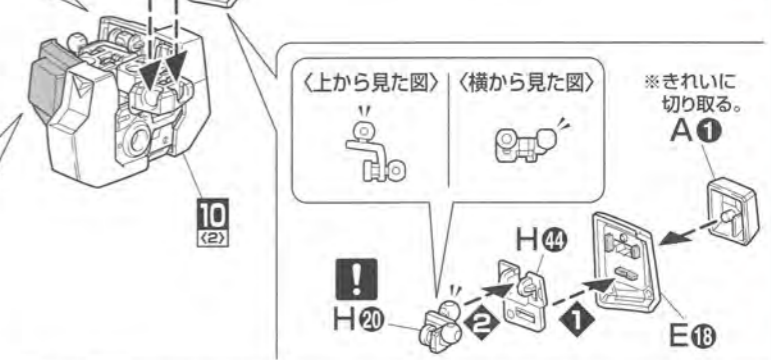
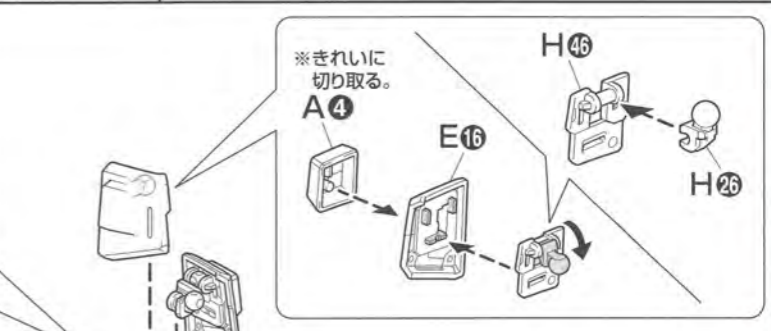
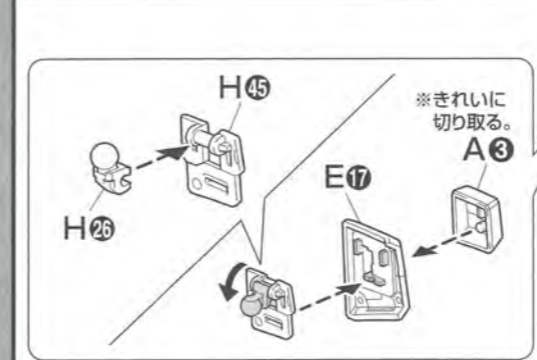
(1) WAIST UNIT



10 (2)



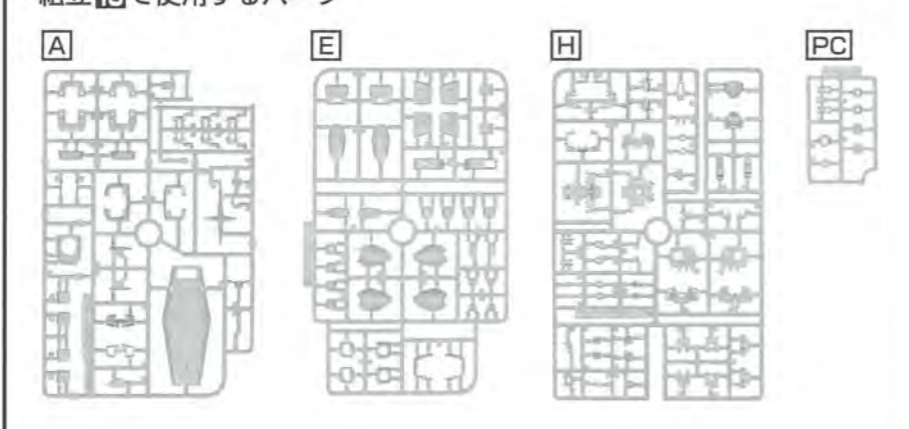
10 (3)



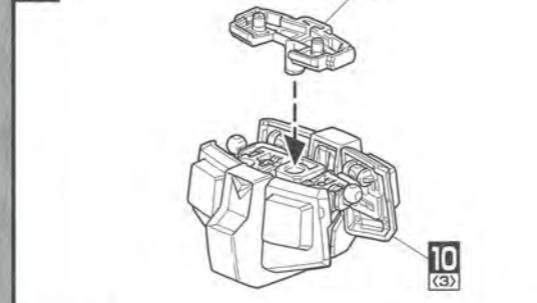
10 WAIST UNIT



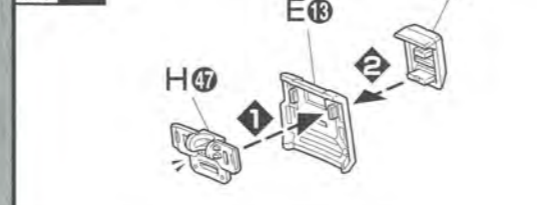
・組立10で使用するパーツ



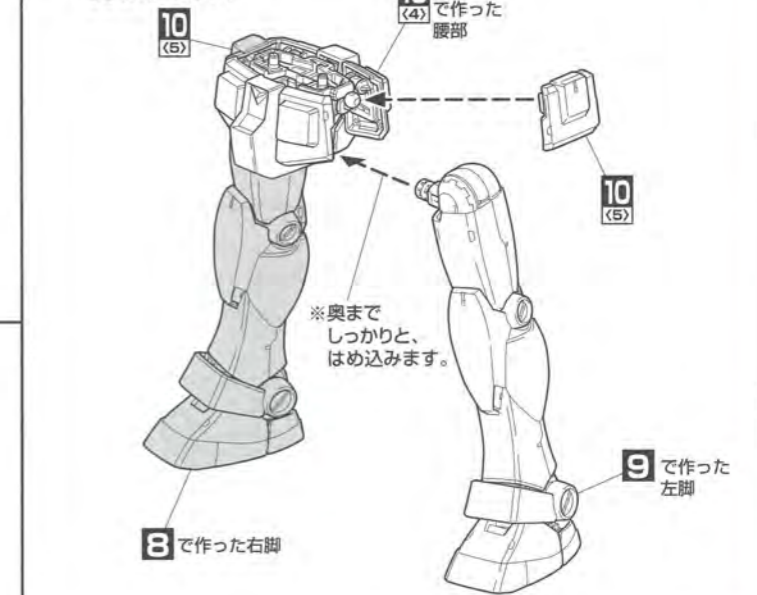
10 (4)



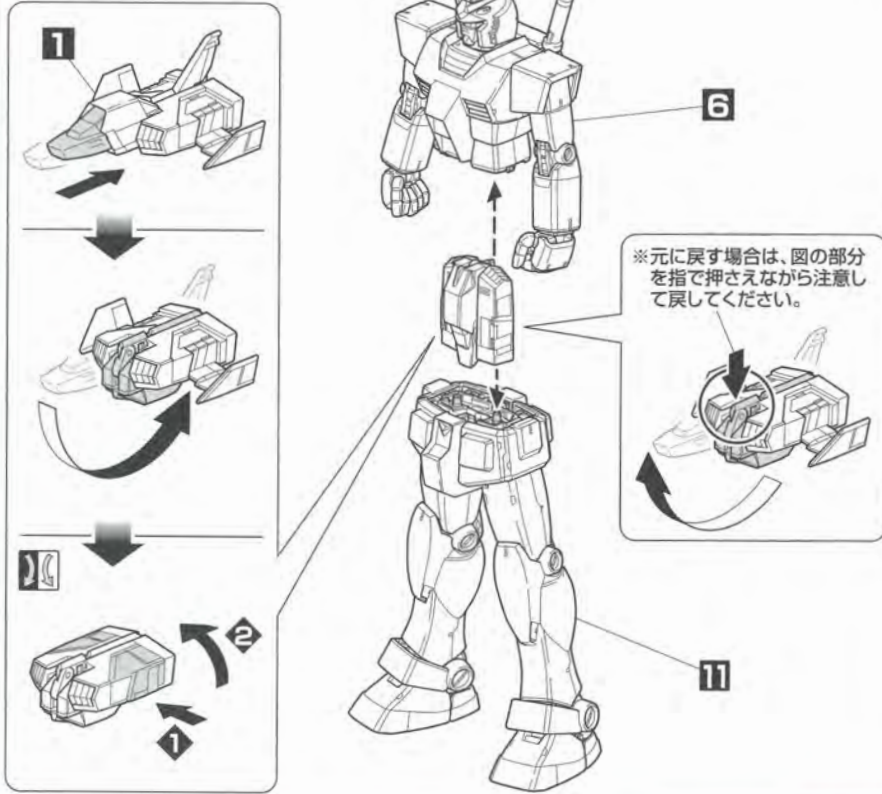
10 (5) x2



11 [下半身の完成]



12 [合体]
COMBINE



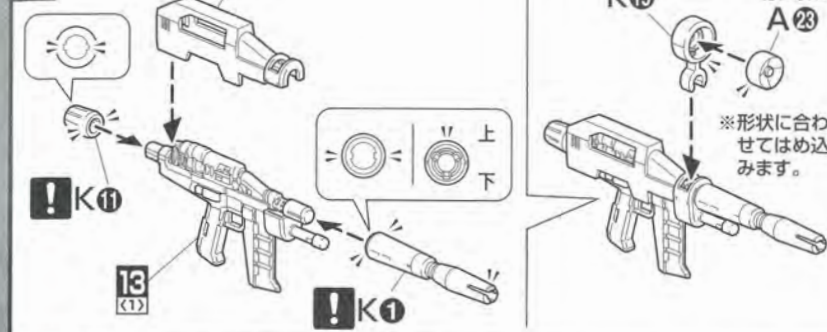
〈コクピットシャッターの開け方〉



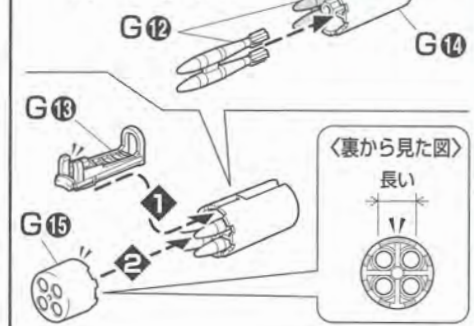
〈コクピットブロックの開け方〉



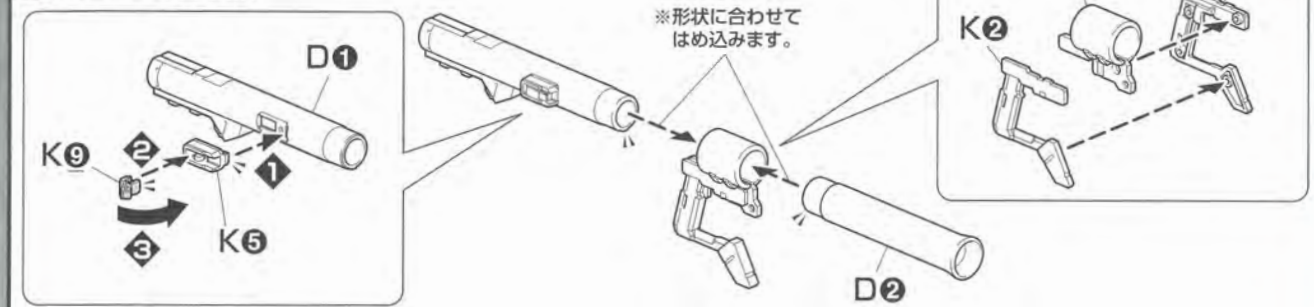
13
(2)



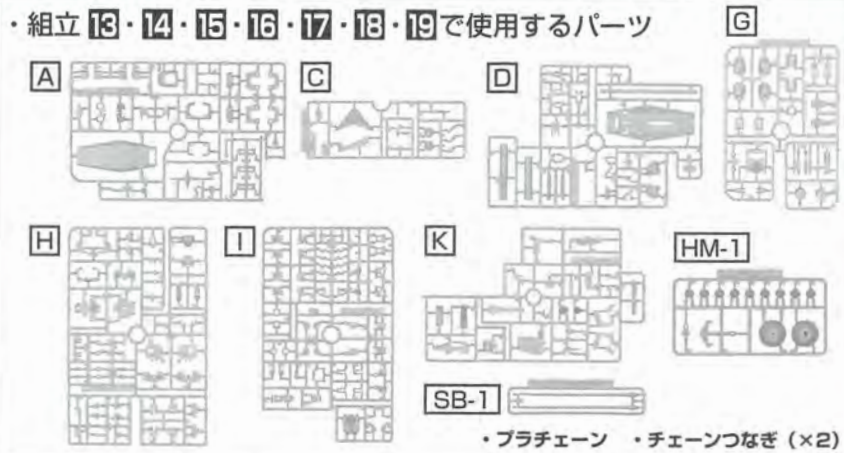
14 [スーパー・ナパームの組立]
SUPER NAPALM



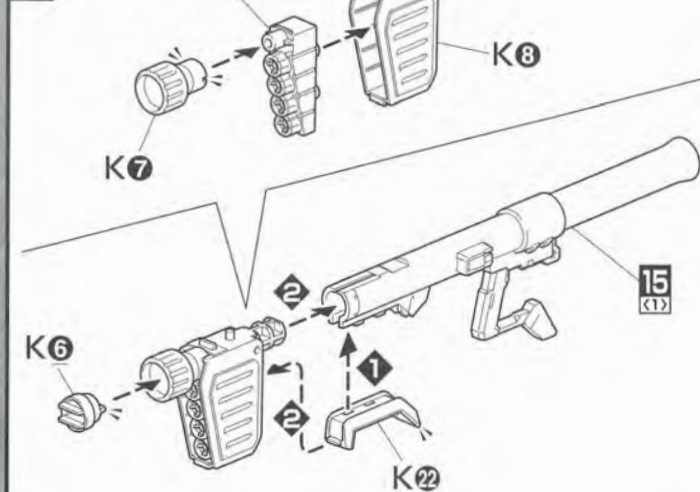
15 [ハイパー・バズーカの組立]
(1) HYPER BAZOOKA



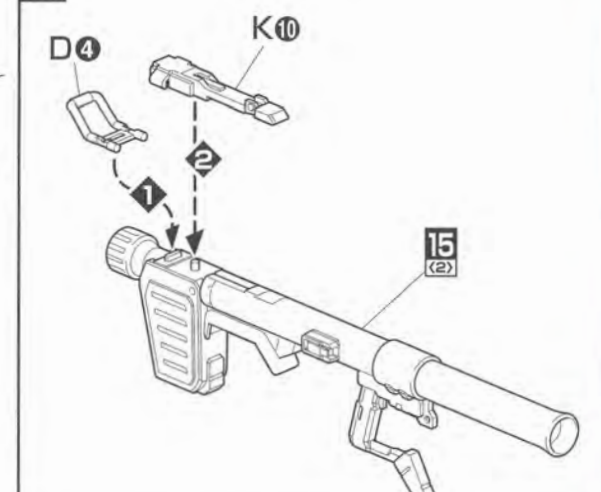
13 14 15 16 17 18 19
WEAPONS



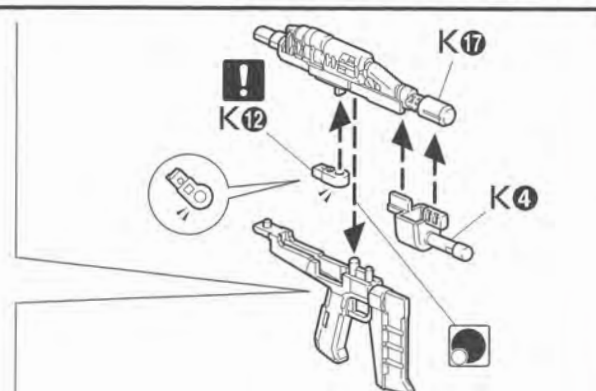
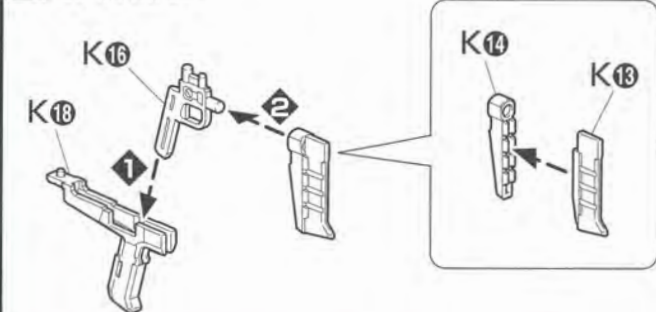
15
(2)



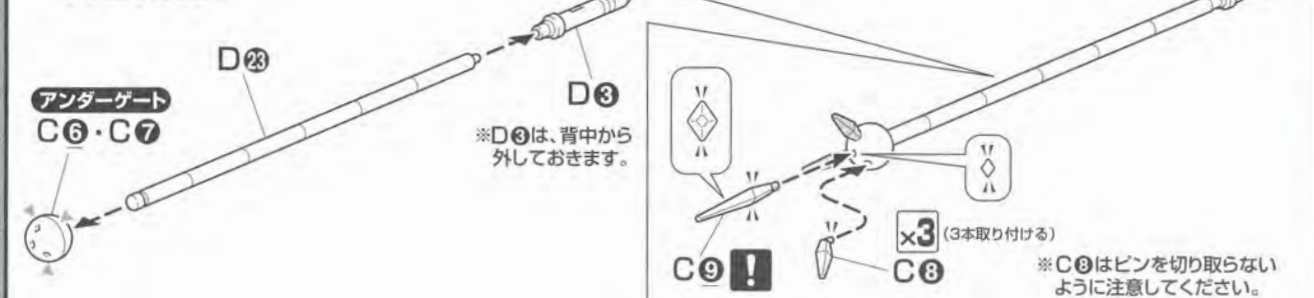
15
(3)



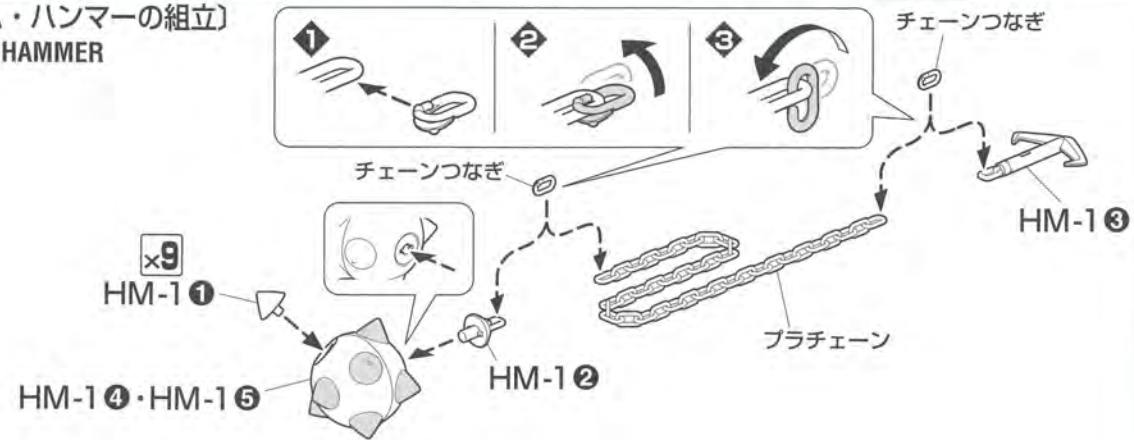
13 [ビーム・ライフルの組立]
(1) BEAM RIFLE



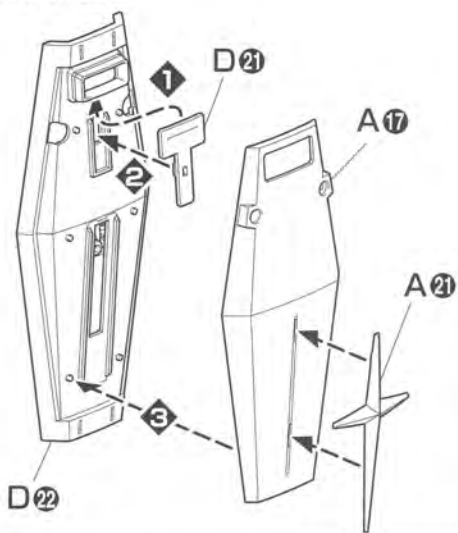
16 [ビーム・ジャベリンの組立]
BEAM JAVELIN



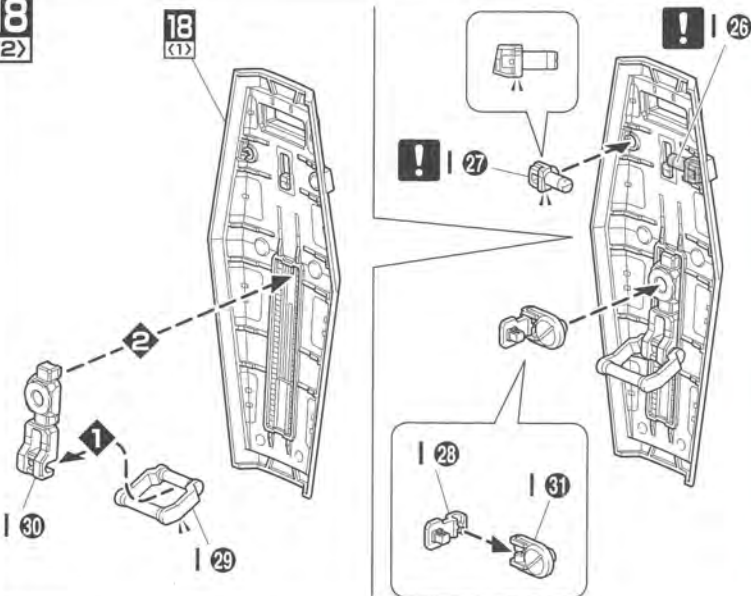
17 [ガンダム・ハンマーの組立]
GUNDAM HAMMER



18 [シールドの組立]
(1) SHIELD

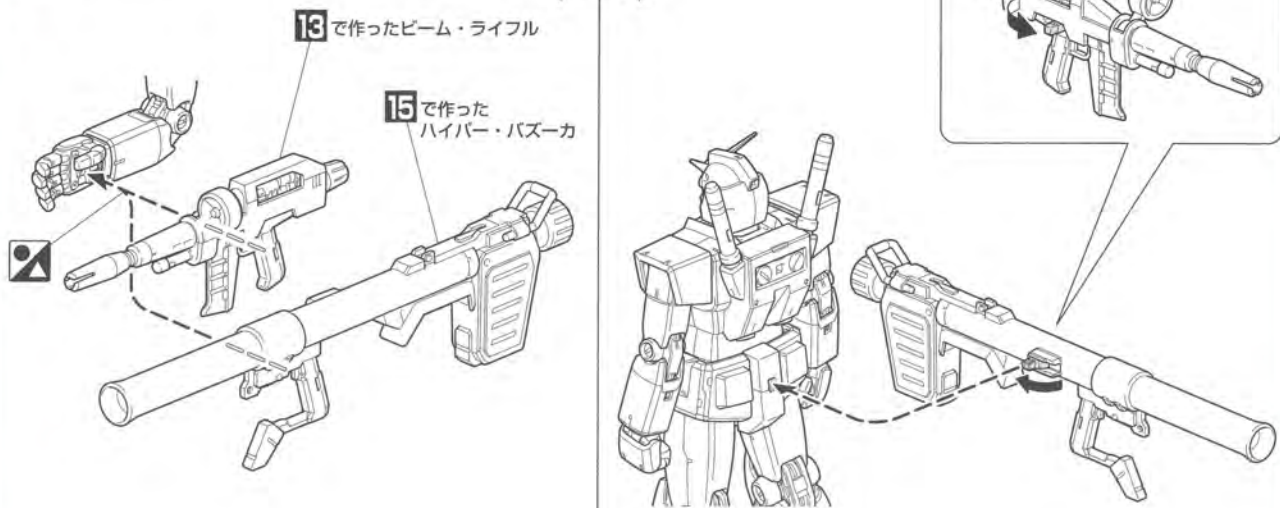


18
(2)

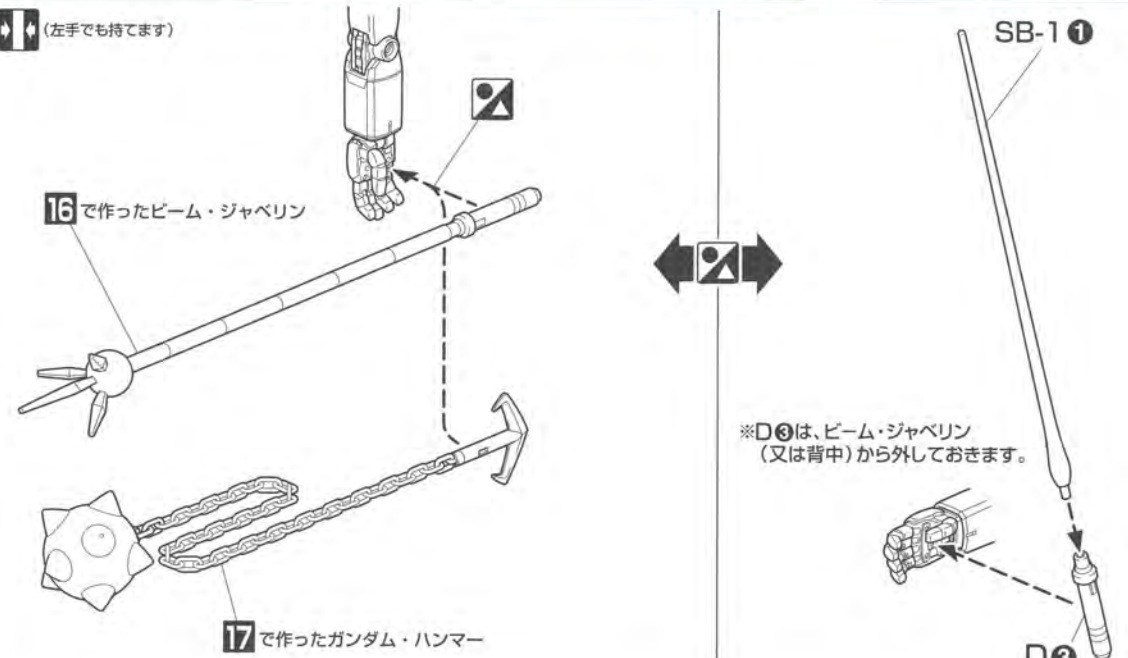


19 [武器の装備]
(1) WEAPONS EQUIPMENT

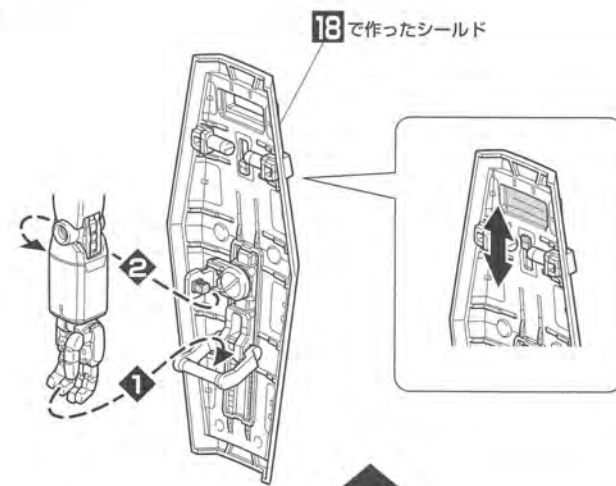
(左腕にも装備できます)



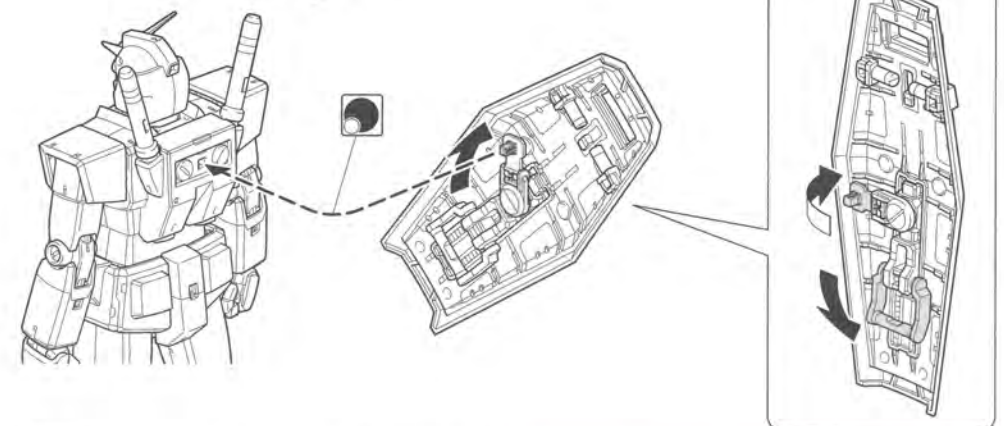
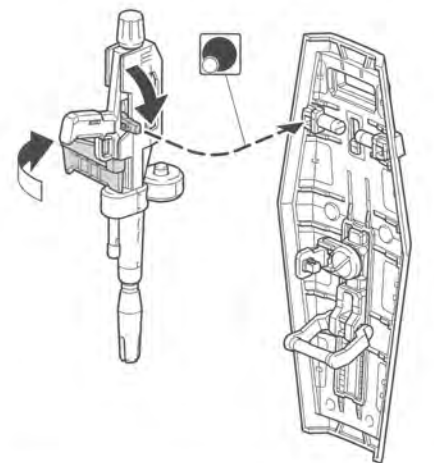
19
(2) (左手でも持てます)

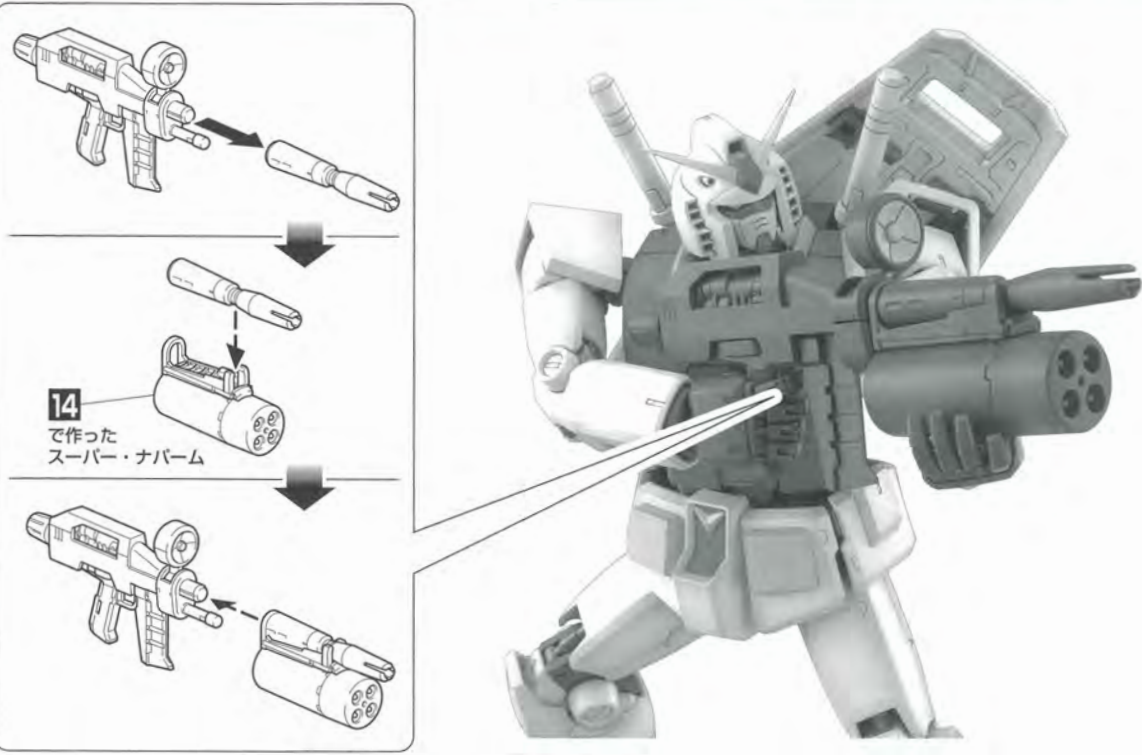


19
(3)

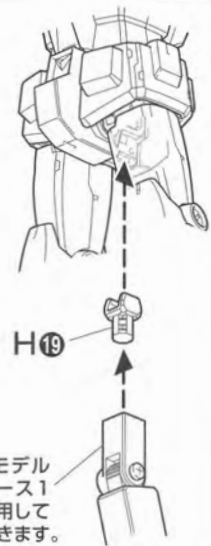


<ビーム・ライフルの収納>





14
で作った
スーパー・ナブーム



※バンダイプラモデル
アクションベース1
(別売り)を使用して
ディスプレイできます。

※D⑥・D⑦は、好みの場所に飾ってください。

Seal

〔シール〕 下の図を見て、マーキングシールやガンダムデカールの貼る位置を確認してください。

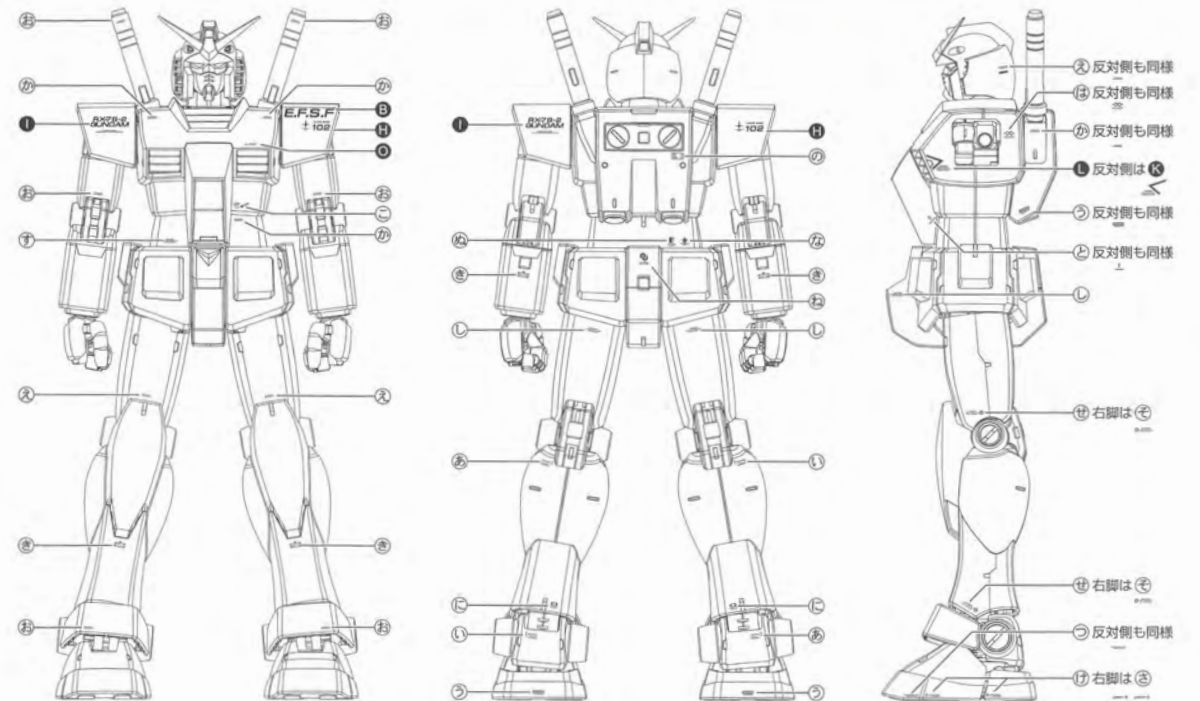
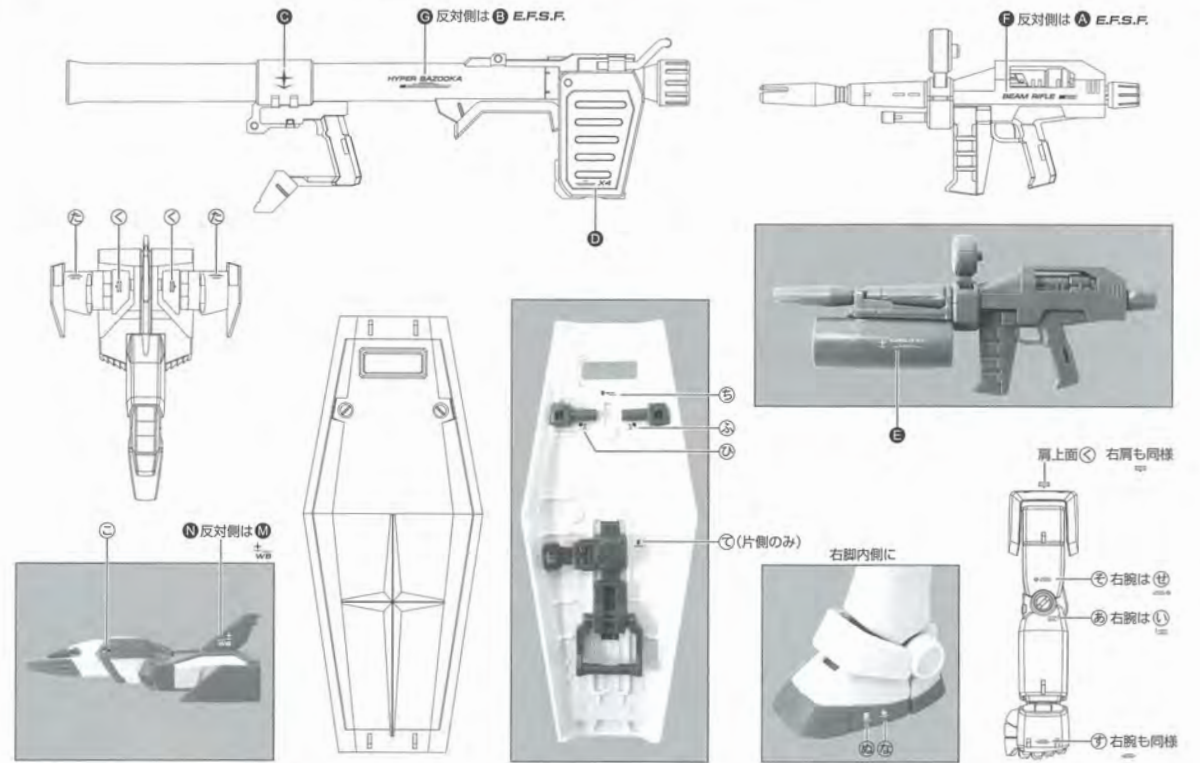
マーキングシールは「ひらがなの黒文字」、ガンダムデカールは「アルファベットの白文字」で表記してあります。

〔例〕 ㊸・・・マーキングシール ㊸・・・ガンダムデカール

〔ガンダムデカールの貼りかた〕

1. 転写するマークを大きめに切ります。
2. 転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
3. シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすりつけます。

このマーキングシール及びガンダムデカールはプラモデルオリジナルのものです。貼り指示は一例ですのでイメージに合わせてお貼りください。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。